
変節

北角 三宗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
変節

【Nコード】
N0073Z

【作者名】
北角 三宗

【あらすじ】
戦国時代、南奥州塩松。

大内定綱の前半生を描きます。

塩松は強国に囲まれた小国なればこそ、周辺諸氏との外交関係で以って体制を維持していました。

定綱は主家石橋氏を放伐し、「塩松殿」の名跡を継ぎます。その後も、情勢を読んで他家を翻弄し、勇躍の時を迎えんとするのですが……。

弘治の頃（1555～58）。塩松は小浜城。

ある昼下がり、大阿弥丸は私室にて、傳人と共に史籍の回読をしていた。

「――壬午 入 吉野宮 時左大臣蘇我赤兄臣 右大臣中臣金連
及大納言蘇我果安臣等送之 自菟道返焉 或曰 虎着翼放之 是
夕 御嶋宮――」

『日本書紀』卷第二十八、天武天皇の即位前紀の件である。

大海人皇子は、この大津を出た翌日（天智天皇十年十月廿日）に吉野へ入り、翌年夏までの半年余りを当地にて頓居する。そして、病床にあった天智天皇が死んだ後、遺児たる大友皇子が自分を弑しようとして計画していることを知るや、僅かな兵を率いて打倒に立つ。そして諸勢力を糾合しながら北へ攻め上がり、挙兵からひと月後には大津朝を滅ぼしてしまう。

寡兵にて立ち、大敵に当たってそれに打ち勝つ。

英雄譚はいつの世も子供の心を惹き付ける。

大阿弥丸もその例に漏れず、退屈な話の羅列に見える『日本書紀』の中で、ここからが最も好きな箇所当たる。この分冊ばかりはもう幾度も読んでいるのに、心は逸った。

そのとき、父の小姓がふすま越しに声を掛けた。

「お父上様がお呼びです」

大阿弥丸は落ち着いた表情で頷いて見せたが、回読の腰を折られ

たことに不快を得、不意の呼び出しに戸惑い、思い浮かばぬその用件を訝しんだ。そして父の書斎へ歩を進めるに伴い、心が石のように重くなってゆくを感じていた。

父にしてみれば、いずれ自分の名跡を継がせることになるであろう嫡男のこと。一族の繁栄、そして主家の栄耀の道を託すことになる以上、万事につけ、高みを目指す気持ちを持ち続けるようにと、薰陶してきたつもりだろう。妾腹の子も幾人かいるが、正妻腹で長男となれば、次代の惣領となることはもはや誰の目にも疑いない。

大阿弥丸には、そんな父の評価が狭い見に捉われているように思われ、殆ど顔を合わせぬ日などないにも関わらず、肉親にも関わらず、馴染むことができないでいる。父の気持ちが解らぬ訳ではない。ただ、惣領としては兎も角も、次代の筆頭家老と言われても、ピンと来なかった。

主君には男子がいない。とすると、いったい自分は誰に仕える為にこのような教えを受けているのだろう、という疑問がずっとあったからだ。

ただ、斯様な期待は余計なお世話と感じつつも、書物も弓馬も嫌いな性質ではないことから、常に自ら進んで鍛錬している。そんな前向きな姿勢に対してまでも更なる啓蒙を求めてくるものだから、一層父を避けるようになっていたのだった。

大阿弥丸は書斎に入って父に対座すると、暫くの間その凝視に晒された。父は珍しいものでも見るように、目を丸くしてジロジロと大阿弥丸の容貌と所作を細見している。

その、いつもは見せぬ父の仕草に、どこか殺気にも似た鬼気迫るものを感じ取った大阿弥丸は、頻りに逃げ出したい衝動に駆られたが、正座した膝の上で拳を握り、じっと我慢していた。

父がおもむろに口を開いた。

「其方を、……養子に出すことにあいなった」

父の膝下の辺りを見つめていた大阿弥丸は、その言葉に対し反射的に目を上げた。耳を疑って問い質したかったが、呑んだ息が継げなかった。

父の後継者となることを疑わなかったからこそ、今の自分がある訳で、それを否定されてしまつては、致仕・放逐と一緒にだと思った。

父が言葉を継ぐ。

「――殿の婿となる」

「……えっ？」

漸く言葉が出た。

主君には、女子も一人いるきりだった。名を志保という。その母は父の妹、つまり大阿弥丸には叔母に当たるので、この女子とはいとこ同士ということになる。

この志保姫は大阿弥丸より少し年上で、主君はこれに婿を取るべく周辺諸氏に様々働き掛けてきたのだが、なかなかまとまらないでいた。

大阿弥丸はずっと、自分はその姫君の婿に入つた者の家老になるのだという、漠然とした思いで系図上の彼女の位置付けを意識しており、彼女自身というものに関心を払ったことなどこれまで殆どなかった。ただ子供心に、まだしっかり見たことのない姫君のことを、その縁遠さから、余程の醜女なのだろうと勝手に思っていた。その程度の存在である。

自分がその婿に入るとは、ゆくゆくは名代にでもなり、姫との間に生まれる子供に「塩松殿」の名跡を譲る役回りになるということ

である。

大阿弥丸は何とも実感がなく、半ば放心状態の父に倣って神妙に座っていた。

1（後書き）

初投稿なので、行間の空け方やら1回分の長さやら、手探りです。
ご了承下さい。

塩松は、南奥州安達郡の東半部にある地名であり、地域の総称でもある。同郡西半部の二本松とは郡の中央を縦断している阿武隈川を境とし、北は伊達郡小手郷、南は田村庄に接する。東の山岳地帯を越えると、相馬領の行方郡や標葉郡に通じる。

地勢は、郡東端にある日山を最高峰として中小の山岳が乱座し、西方の阿武隈川へ近づくに従い平地が広くなる。山岳の谷間を縫うように川が縦横に流れ、それらはいずれも阿武隈川へ注ぐ。小浜川は塩松の中央を南北に縦断、口太川は塩松の東部から南部へ大きく圍繞するように西流する。この両川は小浜北方にて合流、更に阿武隈川へ注いでおり、この二つの川に平行して主要道が走っている。

戦国期、塩松は石橋氏の領分となっていた。石橋氏は足利一門として室町前期に奥州へ下向し、塩松に土着した名族である。

塩松は石橋氏以前から、宇都宮氏や吉良氏といった名門が拝領していた由緒ある土地柄で、石橋氏もまた、二本松の畠山氏と並んで南奥に重きを為していた。

石橋氏の居城は、住吉城と塩松城の二つが本城として存在する。両城は口太川を挟んで東西に隣接しており、蛇ヶ淵の渡しや幾つかの小橋で連結している。そしてそれぞれ東の新殿、西の小浜などの城砦に向けて街場が展開され、本城を中心とした防衛圏とでもいえるべきものを形成しており、重臣の居館の多くがその範囲に収められていた。即ち両城は、周辺部も含めて広大な一つの城域、それぞれを曲輪・出城という位置付けとして把握することができよう。

大内定綱は天文十五年（1546）、塩松の小浜に生まれた。父

は石橋式部大輔尚義の筆頭家老、小浜城主備前守義綱。母は常州太田城主佐竹義篤の娘という。幼名は大阿弥丸。幼くして才気が走り、性は淡白にして礼を重んじ、大声を出して騒ぎ立てるようなこともないが、かといって沈鬱な風情もなく、いつも気付くとその場の空気に馴染んでいる。一方で伶俐な面を持ち、親しい朋輩や近習の些細な誤りであつても厳しく咎め立て、自ら裁くことを快しとする趣もあつた。

大阿弥丸の名は、石橋家が篤く帰依している時衆に因る。

天文初頭、尚義の父先代定義は隠居後入道して静阿を名乗り、居城住吉城域に十願寺金山道場を開山、塩松に於ける時衆の根拠と爲した。その影響によって、嫡男の尚義はもとより、家中諸士に至るまで時衆を嗜んだ。何阿、何々阿という名を好むのは、時衆の特徴である。即ちそれが大阿弥丸の命名となつた次第で、石橋家中ではこれまでもしばしば用いられてきた幼名である。

隠居後も大御所として内外の政事の中心に居座り続けていた定義が天文十四年に死ぬと、当時その筆頭家老の地位にあつた義綱の父義生も後を追つて腹を斬つた。

かくして、慌しく政権の世代交代が遂げられ、前もって尚義付きとなつていた義綱の時代がやってきたのである。そんな中での嫡男の誕生は義綱にとって、政権掌握に花を添える、洋々たる未来を約束するものと感じられたに違いない。

しかし、時代はその祈りとは反対に混迷の一途を辿り、やがて塩松にも暗い影を落としてゆくことになる。

当時、巷では伊達植宗・晴宗父子の相克、所謂「伊達天文の乱」が南奥羽全域を席卷していた。

この擾乱は、天文十一年に晴宗が植宗を当時の伊達氏本拠西山城

に幽閉したことが、発端となっている。父子不和の原因は様々取り沙汰されているが、争乱に至る直接の原因は、植宗の三男時宗丸が越後国守護上杉定実の養子となるに当たって、植宗がその護衛として精兵を多数付けようとしたのに対し、晴宗が異を唱え入嗣自体を阻止しようとした為とされる。

晴宗の思惑は一応遂げられたものの、事態は思わぬ方向へ進んだ。幽閉されていた植宗はその寵臣小梁川日雙によって救出されると、周辺諸氏の協力を得て反撃に転じたのだ。

伊達家中には晴宗を支持する者が多かったものの、周辺諸氏の多くが植宗を支援したことから、開戦当初は植宗党の勢力が晴宗党を圧倒していた。その主勢力となっていたのが、田村隆顕・懸田俊宗・相馬顕胤といった植宗の女婿達や畠山家泰・義氏兄弟・石橋定義などである。この中でも老練な定義は、所領が彼らの中心に位置することもあって、諸勢力間の連繋を取り持って糾合するのに大きな役割を果たしていた。

しかし定義の死後、残された尚義に父の代役は果たせず、植宗党の足並みは次第に乱れていった。そこへすかさず晴宗が内応の手を差し伸べたものだから、諸氏家中内部で対立関係が生まれ出した。各々自領内の平定に力を尽くさねばならぬ状況となり、植宗への協力を控えざるを得ない者が多くなる。その為、元々伊達家中では支持者の多かった晴宗の方へ、一気に流れが傾いていった。すると諸氏の間でも、その動きに敏感に反応した者から次々と鞍替えしてゆき、その傾向に拍車を掛けた。

塩松でも、義綱が中心となって逸早く晴宗支持を表明、亡父の遺志を尊重して植宗党に固執する尚義へ否を突き付けた。そして次々と家中諸士を糾合していった主君の手足を奪い、最終的に尚義に晴

宗と誼みを通じさせるに至った。

この騒乱は結局、同十七年秋に至り、足利將軍からの重ねての和睦命令に従う形で終結を迎えた。但し、終結したのは父子相克のみであり、そこから派生していた数多の対立関係は、その後も延々と続くことになる。

この争いが奥州に於ける戦国時代の皮切りとされる所以である。

その中で大阿弥丸は、僅か安達半郡の塩松を守る為に汲々とし、ときには下手な謀略にまで手を染めている父の姿を、鼻先しか見えぬみみっちい男として他山の石と見なしながらも、心の奥底では本人の気付かぬ内に鏡として培っていた。

暫くして好い日を選び、大阿弥丸は塩松城へ遷ることになった。

小浜城を出るに当たって、父義綱が言った。

「其方がこの家を出、主家の養嗣子になったとて、儂の子でなくなった訳ではない。父親が二人になったと思うがいい。今後は一層自らを律し、塩松殿の後嗣たらんとせよ」

尚義が穏やかな人柄であるだけに、義綱は息子が甘やかされるのを懸念しているようであったが、大阿弥丸にしてみれば甘やかされたとしてそれに溺れない自信はあったし、今後この父の束縛から解放されることに心が浮き立つばかりだった。

兎も角も大阿弥丸は、かくして塩松城に入った。そして日を選ぶと、同地にて元服を執り行い、太郎左衛門齊義と名乗った。

かつて尚義の先代定義は、嫡男尚義に跡目を譲った後も大御所として住吉城に君臨し続けていた。その為、尚義は当主となった後も、それまで数代の間二の丸的な位置付けとなっていた塩松城に差し置かれていた。

だが尚義は、定義の死後も継続して塩松城に住み続けたことから、逆に住吉城は二の丸、或いは大奥的な位置付けとして扱われるようになっていた。

齊義は義父に随って塩松城に部屋を与えられたが、内心は住吉城の方が居心地が良く、こちらに居を取りたかった。

その理由の一つとして、住吉城の書庫には埃を被った蔵書が沢山あり、齊義はそれを思う存分に読みふけりたいというものがあつた。

城内は人も少なく、また二人の父にかまわれることもなかったことから、一人を満喫できる、落ち着ける場所だった訳である。

斉義は、志保姫との婚儀を済ませ、初めてその姿をはっきりと見た。

かなりの痩せぎすで、髪も多少くせつ毛はあるが、思っていたような醜女には見えず、肌も白いし目鼻立ちも至って普通の女だと感じた。ただ、話をするとき少しどもりがあり、知性の面でも父親を受け継いだのか向学心といったものは余り感じられず、斉義が改めて興味を惹かれる部分は別段なかった。

さりとて斉義はこの頃まだ女色の経験がなく、その方面の欲望もさほど強くないということもあるのか、彼女に対しては別段の不満を持たなかった。ただ知識として、「これが醜女である」と頭に詰め込まれただけのことである。

何にせよ彼女の存在は彼にとって是も非もなく在るものであり、「こういうものだ」以上のものにはなかなか昇華し得ないものだった。よって暫く経ってから初めての床入りの後になっても、その感覚は当面改まらなかった。

姫の方でも、自分のような容姿が醜女であるという知識を持っているのか、深い情を斉義に求めることはなく、よっていつまで経っても子を成さなかった。尤も、貧弱な彼女の肉体で子供を宿せるのかということは、甚だ疑わしいものだが。

互いにそんな状態では、とてもすぐに睦まじい関係が築ける訳もなく、斉義が時折通ったぐらいでは、なかなか会話が弾むようにはならなかった。

それでも斉義は、姫のところへ定期的に通った。それは新婚としては極めて少ないものだったが、双方から不満の類は一切出てこな

いことから、両家の父母とて何も口を挟めなかった。

数年が経った。元号は永禄（1558〜70）に代わっている。

斉義を乗せた馬は領内を駆け回っていた。すぐ後には数騎の供が付き随っている。

主要道は元より、裏道細道はおろか獣道に至るまで、塩松中の道という道を彼らは既に精通していた。

道の傍らで農作業をしている領民達は、彼らが通り掛かるとニコリと微笑んで頭を下げる。彼らは領民からの評判が良かったのだ。

斉義が主家に入嗣して以降、領内武士団の特に若衆が皆、彼を鏡と為したことから、自動的に綱紀肅正が行われ、全体的に質が向上した。その結果、斉義へ領民の感謝が集まった次第である。

勿論、初めからそう巧く行った訳ではない。

入嗣間もない頃の斉義は供を連れることを嫌い、単騎で遠駆けなども平気でしていたものだった。それに対して周囲は、頻りに軽拳と諫め、供を具すように言った。

だが斉義は、斯様な心遣いは却って迷惑だった。

家臣たる近習らは、万身体裁を氣にして遠慮するものだから、気分がだらけて一向にのってこない。加えて斉義の方でも、近習に気を遣わせまいと逆に気を遣ってしまうものだから、無駄に疲れるのだ。

そこで千思万考の末、少しでも気を遣わずに済む親族を近習の中心に据え、重用することにした。第一が助右衛門親綱で、第二が長門義員である。

親綱は斉義にとって、腹違いではあるが同年の弟である。

幼い頃から何故かこの取っ付きにくい兄を慕い懐いており、元服して義綱の新たな後継候補の筆頭となった後も、毎日のように兄の許を訪ねては付いて廻っている。

斉義も、彼のことだけではどんなときでも邪魔に感じないことから、これも彼の能力と思って評価し、父達が何も言わない限り好きに居させた。

周囲からはよく似た兄弟と媚びた声も喧しかったが、そう言われると何だか彼に申し訳ない気がして、逆に気が重くなった。

周囲によく気を配りよく笑う、人懐こい性格から、家中の皆に好かれた。

長門は義綱の従弟義円の子である。

幼い頃から、信夫・伊達を中心に修行する山伏となっていた父に従って、山を棲処としていたのだが、斉義が尚義の養子となる祝いに訪れたときに、お付きの者として請われ還俗し、小浜城下に屋敷地をあてがわれていた。

その出自の故か気性は荒く、斉義を主筋と敬う姿勢も少なかったが、斉義にはそれが却って心地良かった。

それに、彼は山を熟知しており、一緒に遠駆けをしても得るものは多かった。よって斉義は、彼のことをある程度敬意を払って接した。

元々の粗暴な振る舞いや性格が改まることはないものの、寵を驕ることもなく、農繁期には野良仕事の手伝いにも進んで精を出している。その故に領民や仲間内から特に好感を持たれた。

この二人を近侍させるようになってから、他の者の斉義に対する態度に少しずつ変化が顕れ出した。つまり、二人を緩衝として御前にてもそぞろに振舞うようになり、更には二人を参考として自然に

接するようになっていったのだ。

だから本当のところ領民達は、彼ら二人に感謝すべきなのかも知れない。

城に戻ると、馬場まで尚義の小姓が迎えに来ていた。

「大殿がお呼びでござります」

齊義は馬番に手綱を預けると、足取り軽く義父の許へ向かった。

案の定、尚義は齊義に甘かった。

待望の後嗣であるから致し方ないとはいえ、ねだられるままに、否、ねだられずとも、ねだられたもの以上に、贅を尽くした馬具や当世具足、更には当時まだ奥州では珍しい鉄炮まで取り寄せたりと、金に糸目を付けずに買い与えていた。

「お呼びですか」

尚義はいつにも増して上機嫌に、入室してきた養嗣子を迎えた。

石橋尚義は世間では暗愚と蔑まれていたが、義綱を始めとする重臣がよく補佐しているのか、決して家中や領内が乱れている訳ではなく、戦乱の打ち続く他領に比べれば寧ろ平穏だった。

ただ確かに尚義は齊義の目から見ても、能力的に恵まれているようには映らなかったし、自己を高めようという野心が強いとも感じられなかった。

ただ、無闇に周囲へ気を配り、民や家中を労わろうという気持ちだけは強く、愚よりは鈍の方が当たっていると内心思っていた。

側女の酌で赤くなった顔を弛緩させ、手を付いて挨拶した齊義に新しい盃を渡すと、手ずから酒を注いだ。尚義は決して上戸ではないが酒好きで、呑むと途端に饒舌になる。

齊義は話が長くなる覚悟をした。

「おことの初陣が決まったぞ」

齊義は口を付けた盃を一気に乾すと、両手を胡坐の膝にあてがい、神妙な顔で義父を見つめた。尚義が続ける。

「――伊達家の騒動は、おことも聞いておろう」

「……はい」

——南奥の戦国時代は、やはり伊達氏の動向抜きでは語れない。

永禄初年以降、伊達晴宗は惣領の座を保有したままで、実権を後嗣総次郎輝宗へ徐々に移行させてゆき、自らは羽州米沢から信夫郡杉目へ遷って、伊達氏の本貫から周辺へ目を光らせるようになった。

これは、晴宗が当主となった際に伊達郡西山から米沢へ本拠地を遷して以降、当地方に相馬氏や畠山氏を始めとする他氏から侵略の目が向けられるようになり、周辺の伊達麾下諸将にも不穏な空気が漂い出していたことに起因する。

その一連の動きの中でやがて、伊具郡北部の伊達一門田手宗光に、相馬を後ろ盾にしていると思われる謀叛の嫌疑が掛かった。

それに対し、輝宗が中途の刈田郡まで出兵して弁明を受け付けたところで、晴宗は「軽拳を避けるように」と輝宗に諫言すべく、伊具郡境の石母田まで出張った。

このとき、晴宗出張の報に接したその老臣中野宗時が、勝手に主不在の米沢にて防備を固め、事態の推移次第では宗光と共謀して輝宗を挟撃しようとしているのではないかと思わせる、疑わしい動きを見せた。

輝宗はこれを一連のはかりごとと判断し、晴宗に対しても不審の目を向けるようになる。身の危険を感じた晴宗は伊達郡東根の保原まで退き、周辺諸氏に籌策を求めた。

現況は、今後の展開次第では、天文以来の大乱にまで発展する危

険を孕んでいた。

齊義はこの事態に関して、尚義の意向に対し家中諸士がこぞって出兵反対を主張していることまで知っていた。遂に尚義が我意を押し切ったのだと察すると、気が重くなった。それが神妙な顔の意味である。勿論尚義は気付かない。この後嗣は自分に異はなかうと信じきっているかのようだ。

「伊達殿からは是非にと請われては、どうして断れよう」

「義父上が私を伴い伊達殿の処へ赴くのは、承りました。されど……これは戦さを避ける為のものでありましょう」

「それは勿論だ。名目上は和解籌策だが、当地へ赴くに当たり、三十騎ばかり出張ることとした」

「何も御身が直接に出張らずとも……。書簡にても用件は果たせるのではござりませぬか。三十騎とはいえ諸士準備に追われることにもなり、出費も無駄に嵩みましょう。また此度の伊達家の騒動、あまり他家の者が口を挟む類のものではないのではと――」

「おこと自身は、自分の初陣を如何思っておる。勿論、戦さにならぬが最善ではあり、戦陣を目の当たりにすることはないかも知れぬが、場の雰囲気を知ることではできよう」

「私に晴れの間を設けてくれようとする義父上のお気持ちは有り難く、また嬉しく感じております。今後行く末を思えば、伊達家中に顔を売る効果もありましょう。されど……」

尚義は満足そうな顔をして、齊義の言葉に割って入った。

「さもあるうさもあるう。おことならば、そう言うてくれると思っ
とった」

そして尚義は、このところ酒を呑むと毎度口癖のように語って聞かせる話を、ここでも繰り返すのだった。時折ろれつが廻らなくなるものの、いつも言っている文言だけに、言葉の選択が次第次第に洗練され、まるで何かを読んでいるかのようなのである。

「かの天文の大乱の折、諸家中面従腹背にして叛腹常ない有り様だった中、ご先代の塩松のみは平静を保ち、伊達家の和睦調停に重きを為しておった。されどご先代は志半ばにして病に斃れ、残された儂は若輩にしてその能力ご先代に及ぶべくもなく、大乱は当家中にまで浸食されることとなってしまった。今度こそ伊達家の内紛を調停しおおせ、ご先代の遺志を貫かん」

尚義はそこまで一気に言うと、満足した顔で盃を口に運んだ。

義綱らも、尚義にそう言われては、そもそもあのかのときに主君へ否を突きつけたという後ろめたさがあること故、重ねての反対はできなかったことだろう。

齊義も、これ以上何を言っても効果のないことを悟った。

日を選ぶと、尚義は留守を義綱に任せ、もののしく出陣した。

一行は塩松を出ると、川俣を経て月見館へ至った。

伊達郡内では広瀬川の流れに沿って北上する。即ち、三春方面から塩松・川俣・懸田を経て梁川で仙道の本街道と合流する、「小手道」と呼ばれる南奥州を縦断する脇街道として古来重要視されている道である。

川俣領主桜田氏は伊達氏の麾下ではあるが、比較的自立性が強く、周辺の領地は自治領となっている。よって、川俣・懸田の中間点に当たる月見館の地峡部から、本式に伊達領となる。

天文末年に晴宗が当地方の領主懸田俊宗を滅ぼす以前から、当地は要衝として重要視されており、伊達治下になってからは更に新たな城砦や関所が築かれ、街場も大きくなっていた。

その理由は勿論、塩松への警戒ということもあるにはあるが、それよりも相馬に対する備えとしての色が強い。

即ち、月見館南北麓から東へ向けて、海道まで通じる二筋の分かれ道が走っているのだ。いずれも相馬軍による伊達郡遠征の際に通り道・関門とされ、天文の乱当時も、行方郡の小高を本拠とする相馬顕胤の軍勢が幾度となくここを通過して、懸田氏の助勢に駆けつけている。

相馬氏は、乱終結後間もなく急病に斃れ夭折した顕胤の跡を、若年の嫡男盛胤が継いでいた。爾来暫く、盛胤は自領内の統治に力を注がねばならぬ状況となり、それは晴宗が懸田討伐を容易に成し遂げ得た要因にもなっていた。

尚義一行が小手道を北上すれば、月見館本館は右手に現れる。それ自体は小型の山城であるが、周囲は塩松の中心地にも劣らぬ活況となっており、川俣以降人の往来も増えていた。

これが伊達領の南限の一関門であることを併せ考えるに、斉義は伊達家の規模の大きさに打ちのめされる思いがした。

その様子に気付いたのか、尚義は気分良さそうに馬に揺られていく。

一行は関所通過後、懸田から小手道はずれ、保原城へ至った。ここまでが一日の行程である。

当城は晴宗の功臣中島伊勢の居館である。現在の流れとは離れたが、当時の当地は阿武隈川の氾濫原上に存し、川から導水して堀を為し、曲輪を形成する平城としてあった。

尚義と斉義は、この城内で晴宗に対面した。

「これは塩松殿。ご足労いただき恐縮」

「我らにできることあらば、何なりと申しつけくだされ」

斉義は二人の様子を窺っている。尚義は幾分緊張が表情に出ていくようだ。

晴宗は口元を小さく歪めているが、どうやらそれが喜んでいる表情らしい。されどその造作は、鋭く厳しい目つきともあいまって、神経質な性格をよく醸し出していた。

「輝宗は些か猜疑が過ぎるようだ。気持ちは解らぬでもないがの」「と、言いますと」

輝宗が警戒しているのは、今伊具郡で起きている紊乱そのものだ

けではなく、その処理如何によっては領内のどこまでも飛び火し得るという家中の統治体制にある。

今回、田手宗光への対応が余りに寛大な処置では、家臣達は皆、主家を甘く見るようになるだろうと考えているのだ。

現に中野宗時の動きは余りに輝宗、延いては主家を蔑ろにした行為であり、晴宗の意を受けたものでは勿論ない。

晴宗はそれを承知しながらも、長い間苦楽を共にしてきた重臣達をただ見殺しにする訳にも行かなかった。

また、輝宗の意見通りに締め付けを強めれば、家中諸士の反発を招き、家が四分五裂してしまうかも知れないという懸念もあり、ずるずると斯様な状況へと落ちてしまったのだ。

この状況を正しく理解していれば、晴宗とて始めから尚義に調停そのものを期待などしていないということは、判ろうものだ。

即ち、現在の伊達家中を元の鞘に収められる者は、一人しかいない。

「塩松殿には、丸森まで行って貰いたいのだが……」

尚義の表情に一瞬緊張が走った。

「すると、円入殿に仲介の労を執っていただくという訳ですな」

晴宗は石母田から伊具入りしようとして、輝宗から鉾先を向けられた。

そこで、尚義に伊具入りして貰い、同郡丸森村で隠居している植宗に仲介を頼もうという訳である。

人畜無害な尚義なれば、輝宗とて何の謂われもなく攻撃を加えることはあるまい。

植宗は天文の乱の和睦条件に従い、丸森を始めとする周辺五箇村を隠居扶持としてあてがわれ、その後入道して直山円入を号していた。

伊達家政の表舞台から遠ざかって暫く経つが、家中諸士及び周辺諸氏への影響力はまだまだ保っている筈である。殊に相馬氏とは乱後も引き続き懇意にしており、これ以上の適任者はいなかった。

漸く話が通じ安心したのか、晴宗は斉義を向いて表情をほんの少し緩めた。それでもその視線は、慣れぬ斉義にとってまだまだ威圧を感じるものであった。

「そちらが太郎殿じゃな。噂に違わぬ面構えをしている」

斉義は油断していた。突然に話を振られたことに動揺し、晴宗の視線に思考能力を奪われ、何と答えてよいやらまるで言葉が浮かんでこない。

しかしそこへすかさず、尚義が嬉しそうに話に割って入った。氣付けば、当初の緊張はもうすっかり散じている様子である。

「伊達殿の推挙がなければ、手持ちの人材に氣付かぬところでした」

「暫く見ぬが、備前は元氣でしような。当方が落ち着いたら、どうか一度遊びに遣わしてください」

齊義は、晴宗が言った自分に関する「噂」とは如何なる噂か、婿入りの話を自分に持ってきたときの実父備前義綱の表情と併せて、氣になった。

天文の乱の折、植宗党だった尚義を晴宗党へ導いたのが義綱である。

当時から義綱は伊達通となっており、殊に晴宗の塩松番となっていた石母田安房とは懇意にしていた。

安房は塩松訪問の際には小浜に幾度も宿泊しており、齊義も幼い頃からよく見知っていた。その辺りの筋から、自分に関する何らかの情報が伊達にもたらされ、婿を探している尚義へ推薦するという過程があったのだろう。

また、齊義の弟親綱の室も、この筋を経由してあてがわれている。中野宗時の娘がそれである。

晴宗は表情を動かすことは殆どなく、媚びるように明るい表情をコロコロさせている尚義とは対照的だった。

翌日、一行は晴宗から預かった書簡を携え、丸森に入った。

丸森城は、阿武隈高地の北辺から西へこぼれた突端部に位置する山城である。

麓を南から西を経由して北へと、本丸を三方から囲繞するように内川が流れ、阿武隈川へ注いでいる。城は西側の川に突き出た曲輪

を頂点に、東へ連なる梯郭式となっており、古来伊具郡の中心として、そして阿武隈廻船の中継基地として、栄えてきた場所柄である。

尚義の表情は、保原を出たときから緊張でこわばったままだった。晴宗と会ったときの比ではない。

植宗と晴宗はとうに和解しているとはいえ、寝返った尚義にとっては、やはり依然として会うのにはつの悪い相手ではあった。

植宗は、白銀の総髪に袈裟をはおり、穏やかな表情で一行を迎えたが、その所作はすっかり老爺の趣となっていた。

「塩松殿、久しいのう。そちらがお嗣子か」

尚義は、植宗の優しい言葉にすっかり恐縮し、「あの」とか「はあ」しか発せないでいる。それを差し置いて斉義は、保原での失態を挽回するように、意気込んで挨拶した。

「お初にお目にかかります。太郎左衛門斉義にござりまする」

「うむ。利発そうな若人じゃ。当家の総次郎殿とは、歳も近かろう。相馬の孫次郎殿と同年くらいかの。どうか皆、末永く仲良うして欲しい」

相馬の孫次郎とは、盛胤の嫡男義胤のことである。相馬氏と懇意にしていた植宗は、丸森に遷ってから一層相馬をいたわり、末娘を義胤に嫁がせている（後に離婚する）。

尚義は、植宗と斉義の会話で漸く少し緊張がほぐされ、用件を伝えた。

「保原より書簡を預かって参りました」

植宗は受け取った書簡に目を通した。

「総次郎殿は早熟じゃ。若氣の血氣にうかされて足元をすくわれぬよう、儂からも一寸言うてやらねばとは思っておった。……ところで塩松殿、御辺らはこれから何処かへ攻め寄せようという趣向かの」「えっ。いや、あの……」

塩松城を出たときから尚義は大鎧、斉義は当世具足を身に着け、他の武者も胴丸・腹巻を着用、すっかり臨戦態勢を整えている。保原で一泊して状況が大方見えてきても、尚義が総武装を解かない以上、諸士もそれに追従せざるを得ず、連日軍容を調えての行進は行列の全員が負担に感じていた。

「助力を請け負って貰えるのは有り難いが、そのなりでここに居られては、却っていらぬ混乱を招きかねん。通達の旨は承ったので、早う戻って晴宗へ伝えてくだされよ」

尚義の顔は赤くなって、再び固まってしまった。

一行はそのままとんぼ返りで丸森を発つと、途中再び保原にて晴宗と面会、城下で一夜を過ごし、翌日往路と全く同じ道を辿って塩松へ戻った。

結局、この混乱はその後も収まらず、収束まで数年を要す。

晴宗は混乱が終結したら輝宗に跡目を譲るとし、輝宗は現況のままで跡目を継ぐことを望んだ。

問題は、中野や田手といった旧来の重臣が輝宗を蔑ろにして家政を牛耳ろうとしている、という疑いがあることである。

晴宗が何とか穏便に済ませたいと輝宗に寛恕を求めても、輝宗は誅伐を主張して譲らなかった。しかし、まだ正式の当主になっていない輝宗の手勢だけでは、それらの勢力を討伐することも叶わない。

この間、植宗はずっと和解への道を探り続けていたが、その道は開けぬままに体を壊し、枕の上がらぬ身となった。

結果、これを機として父子は漸く互いに歩み寄りを見せ始める。そして「田手氏の家格を一門から一家に下げて所領も減封するが、

他には手を出さない」という条件を輝宗が呑み、正式に跡目が譲られる運びとなった。

だが、この一応の解決に、植宗は間に合わなかった。享年七十八。その逝去は永禄八年六月。輝宗の後継はその後間もなくであった。

晴宗は、立場は変われどその後も杉目に住し続ける。

輝宗も跡目こそ譲られたものの、中野宗時一派が依然輝宗に出仕せず、家士を代理人として用を足していることに対し、何の手出しもできずにいた。

因みに、この宗時の家士の名を遠藤文七郎という。

結果として宗時はますます増長してゆき、元亀元年（1570）に至って、遂に輝宗との間に戦端が開かれる。

そして戦さに敗れた宗時は相馬へ逃れ、更に会津へ流れてゆく。

この戦いで文七郎は輝宗に内通し、その信任を得、第一の側近としての地歩を踏み出すことになる。後の遠藤山城基信である。

結果として尚義の出兵は、直接には殆ど何の役にも立たなかったが、塩松に戻った後、斉義は一つの建策をして容れられた。

月見館の威容を目の当たりにした斉義は、これに対応する城砦が塩松側にないことを心許なく感じた。

針道や木幡に城砦はあるものの、それは当地を統治する麾下家臣の持ち城であり、厳密には石橋氏のものではない。

よって、直轄する北部要衝を築くべきであると主張したのである。

そして選地されたのは、針道郊外の愛宕森である。

隣接する白猪森をも取り込んで利用すれば大軍を籠らせることもできるし、盆地が北に拓けて伊達領境まで見渡せることから、まさに伊達氏の南方経営に対応する堅牢と為すのに相応しかった。

この要害は早速に縄張りが始められ、小手森城と名付けられる。

斉義はこれを端緒として政事への関与を深め、家中にて高い評価を得るようになる。

次第に面持ちや体格も大人び、周囲の接する態度も一人前扱いするようにならわっていった。

その為、結果として尚義を蔑ろにせざるを得ない行動も目立つようになり、かつての睦まじい関係は次第に冷えてゆく。

斉義は一層塩松城に居づらさを募らせたことから、尚義に願い出て住吉城内に部屋を与えられ、姫を伴って遷った。

そのような状況になっても、斉義は（心中はどうあれ）形式的には尚義への礼を重んじ、孝を怠らぬよう、気配りに意を用いている。

尚義としても、独自の勢力を築こうとしているのが替えのいない後継者であることを知っていたから、「廃嫡」という波風を立てんと謀る一部の側近の声に難色を示していた。

ただ、酒を呑んで万事を人任せにし、自らは総てを流すことが多くなっていた。

数年が経った。

この間、養父子の関係は（表面上は）何とか平穏を保っていたが、永禄十年に至り、事情が変わった。

前年尚義は、一人の妾から勧められるままに禅僧の講義を受け、求められるままに堂を一字寄進した。特段のことをした訳でもなかったのだが、暫くして加護が顕れる。

その妾が身ごもり、この年の春に男子を産んだのである。

この子供は松丸と名付けられ、母子共に住吉城の奥向きから塩松城に遷された。母親は大河内備中の娘である。

大河内氏は石橋家の家老で、家格では大内氏と同様である。これまでは筆頭家老たる義綱の施策を後援する姿勢を貫いていたものの、この一事によって備中は、義綱への対抗意識を俄かに燃やし始めた。

尚義としても、才気走るばかりで最早かわいげのない（既に情も半ば失せている）養子よりも、愛らしい実子の方へ心が移るのは自然のことで、寝ても覚めても「お松やお松や」と、それこそ目に入っても痛くないというほどの可愛がりよう。

妾や舅に促される形で、斉義を廃し後継を松丸に据え直す決心をするのに、さほど時間はかからなかった。

齊義は直接にその旨を言われる前から、廃嫡される予感を抱いていた。

このことに関して、養子よりも実子が可愛いという尚義の思いを恨む気持ちはないものの、疎外感是否応なく押し寄せ、今後への不安はどうにも拭えない。

実家に戻されるだけなら良いが、冤罪を着せられ誅されてしまうのは御免だし、やはり一度は手にしかけた塩松殿の座をただ空け渡すのも癪だった。

考えた末、斉義は住吉城内に部屋を与えられている尚義の側室や妾数人に付け文をした。尚義に洩れぬようにという配慮は勿論、遠からぬ過去に尚義が通ったという履歴の下調べなど、事前の根回しにぬかりはない。言うまでもなく、志保姫にも秘密である。

彼女達の心には、酒乱気味で老年に差し掛かっている尚義に気兼ねする部分は既になく、いっそ斉義の妾であったならと願う者ばかりだった。そしてそれは、そんな側室や妾達の心証を慮っているそれぞれの侍女達も同様だった。

斉義の許には、日時を書いた熱い返書が複数寄せられた。

そんな中、尚義は無防備にも斉義を城に残したまま、松丸母子を伴って昨日はこちら明日はあちらと行楽にうつつを抜かしている。

また、松丸誕生は禅宗に皈依した加護だとして、十願寺を廃して時衆僧を皆追い出し、その寺領を全て招聘した禅僧達に与えた。領内全域にも触れを出し、殆どの時衆道場は他の宗派に取って代わられた。

人々の目がそれらのことを向いているその間に、斉義は返書をよこした妾の全員と、それぞれ数度に亘って情交を結んでしまった。た。

丁度、それまで心の拠りどころとしていた時衆を失い、不安を募らせていた彼女らを慰める、という旨い口実があったこともあり、事を運ぶに当たって障りはまるでなかった。

斉義は決して捨て鉢になっていた訳ではない。策略あったのこと

である。

即ち、尚義の酒癖——每晚酩酊するまで呑んで翌朝になると昨晚の記憶がなくなることが多い、周囲から盛んに迷惑がられているその酒癖に目をつけて、将来の再起を目指し、塩松の行く末に混乱を巻き起こさんと種を播いていたのだった。

やがてそれは芽を出すことになる……。

案の定、秋を前に斉義は一方的に放逐され、義綱の許へ返された。少年期から青年期の十年余を、尚義の後嗣として過ごしたことになる。

姫君との間には相変わらず子がなかったが、離縁させられることはなかった。

松丸という後継者があることから、新たに婿を取る必要もないのは当然ながら、大内氏の礼聘を継続させる為の配慮には、尚義なりに気を遣ったのもあろう。

斉義から「尚義の後嗣」という資格は剥奪され、斉義が婿として石橋家に入るといふ形から、姫が大内家の嫁に入るといふ形になった訳である。

またその御免料として、尚義から銘馬と十文字の銘槍が下賜された。そして他に何か欲しいものがないか訊かれると、斉義は住吉城の書庫にある蔵書を望んだ。

尚義は「何だそんなことか」と、一部家相伝の物を除いてそれを許可した。

大河内一族を除く全ての家中は、斉義放逐の決定に溜息をこぼした。

これまで家中は皆、斉義が尚義の跡を継ぐことを当然と信じて多大な貢物で誼みを通じ、また斉義が継ぐことで家が隆盛に向かうことを期待していたのだ。

それほどに斉義の評価は、内外に高くなっていた。

「太郎、口惜しかろう。儂も今度ばかりは辛抱ならん」

義綱は小浜へ戻って挨拶に来た斉義を前に、齒軋りして悔しがっている。

されど斉義は、今回の一事で家中が皆心情的に味方となったことを感じ、また、犯した禁忌を一切暴かれることなく小浜へ戻りおおせたことから、今後の展開が楽しみでならない。そんな気持ちを抑えるのに腐心した結果、知らず通常よりも冷静に振る舞っていた。

「父上、今暫く辛抱なされませ」

そう言うと、齒を見せて口を笑った形にした。

義綱は口をぽかんと開けたまま言葉を失っていたが、斉義は構わずに一礼して退出すると、親綱の屋敷へ向かった。

親綱は再び大内家の後嗣の座を斉義へ空け渡すことになる。

だから斉義も彼に対してだけは後ろめたく、済まない気持ちを感じていた。――だが、何と言って会えばいいのか。あれこれ思いを巡らせど巧い言葉は浮かばず、裏腹に会いたい気持ちから進む歩に考える時間を削られ、まるで考えがまとまらぬままに面会してしまった。

しかし親綱は、そんなしがらみはまるで感じさせずに、いつもと変わらぬ明るい笑顔で異母兄を迎えた。

「帰りましたね」

思わず口を突くままに戯れ言が洩れた。

「当面、……この顔を毎日お目に掛ける」

「なに、住吉まではるばる会いに行く手間が省けるだけのことです」
緊張が一気に解けた斉義は、大笑いをした。自分でも珍しいこと
だと思った。

すっかり気分が楽になったところで、斉義は志保の許へ戻った。外出もまれな深窓の姫君は、駕籠にほんの短い間揺られただけで具合を損ね、小浜に着くや義綱へ挨拶もせぬままに床を敷いて休んでいた。

斉義が顔を出すと、志保は床から身を起こした。

「少しは楽になったかね」

「ええ。今からでも貴方のご両親へ挨拶に参らねばなりません。すぐに準備致しますので、少しお待ちください」

「よいよい。そんなものは。これまでと違い、狭い所帯。そのうち嫌でも顔を合わせることになる故、何も気にすることは無い。志保のことは話しておいたから、今日はこのまま休んでいるがいい」

志保は「でも」と躊躇っていたが、やがて斉義に従った。そして俯いたまま、斉義に侘びを言うのだった。

「私も再三父上には申したのですが。一度決めたらなかなか他人の言うことを聞かぬお人でありますよって、貴方には何とお詫びを申してよいやら」

「何のことだ」

「『塩松殿』の名跡は貴方が継ぐのが相応しいとは、家中の誰もが、奥向きの者にすら異存のないことでありました」

斉義は「何だそのことか」と気にも留めない風であったが、ふと意地悪そうな目をして凄んでみせた。

「追ってこの儂が主家を滅ぼし塩松殿を篡奪すると言ったら、其方

は如何する」

志保はまるで落ち着いたままである。

「父尚義を、また松丸君を塩松殿たるに足りぬ器量であると、ご自身を塩松殿と自認して周囲もそれを認めるならば、是非ともおやりなされ。それがお家の安泰となりましょう」

斉義はこのところ、志保の成長に目を見張っていた。

身体的なものや知識ではなく、人間的な。つまり、会話をしている気がストンと楽になるときがあるのだ。

本気とも戯れ言とも取れる危うい会話でも斯様に気楽に話せるのは、彼女の気持ちの大きさが受け皿になっているからだ、と、斉義は感じていた。

結婚して十年、漸くのように打ち解けてきた夫婦は、一つの束縛から解き放たれ、この後速度を増して親密になっていく。

斉義は微笑んだ。

「志保が塩松殿の系譜を途絶えさせぬことを望むのなら、そのように心得よう」

志保も曖昧に微笑みを返した。

それからの斉義は、尚義から下された十文字槍にて鍛錬を重ね、馬で塩松中を僅かな供を連れ、時には単騎で駆け回って過ごす日々だった。供の面々も、それまでと殆ど同じである。

即ち変わったことといえば起居の場を遷したことだけで、斉義にしてみれば却って快適な生活である。

放逐の事情はすぐ一般領民にまで知れ渡り、斉義は彼らから一層慕われた。

斉義も、それらの態度の多くが同情からのものと気付いていた

が、そんなそぶりはおくびにも出さず、只管に人の好い若様を演じている。

義綱の怪訝な表情だけが時々煩わしかったが、口を挟んでくることもないことから、気付かぬ振りをして放っておいた。

齊義放逐から暫くして、尚義妾に再び懷妊の報が出た。今度は百目城主、石川摂津綱政の娘である。

石川氏は常陸国境石川庄の庄司の庶流で、古来塩松地方の土豪として勢力を張り、中央から塩松へ下向してくる諸名族の麾下となることで家を保ってきた。

よって石橋家中での家格こそ低かったが、この摂津は持ち前の社交性と周辺諸氏に名と顔が売れていることによって、家老並に推挙されていた。

居城百目城は塩松東南端にあり、その支配領域は相馬領と田村領に接している。即ち石橋家に於ける両氏との関係の構築維持は石川氏に委ねられ、石橋家中の相馬番と田村番を兼ねていた。

尚義がこの歳になってからの俄かに続く妾の懷妊に対し、不審の噂も影ではまことしやかに囁かれていたが、尚義はそんな声は齒牙に掛けず手放しに喜んだ。

義綱は焦る心に唇を噛む日々を続けていたが、齊義は平然としており、時に父の名代として塩松城に出仕しては、過去に尚義の養嗣子としてあったことなど忘れたかのように、臣下の礼を以って伺候したりしている。

その姿勢は多くの者に感銘を与えた。

尚義も、放逐後の齊義の潔さに感心し、昔の如くとまでは行かずとも、再び好意的に接するようになっていった。

翌年の春を迎えると、尚義は松丸を伴い、大河内氏の実家宮森城

内の塩松神社へ宮参りすることになった。昨年の誕生以来、何度も私的には参詣していたが、今度のは公的意味合いが強く、大規模なものだった。

大河内家の本拠宮森城は、小浜の南隣、小浜川の西岸に立つ小型の山城で、南大手、北搦手、南から西麓に掛けて小さな街場が形成されている。

神社は城域の北曲輪に位置する。前九年の役の折、源頼義の臣伴助兼が尊信する宇都宮慈現明神を勧請したのが縁起で、大河内家はこの神社の宮司職も兼ねている。そもそも宮森の地名もこの神社に因っている。

参詣を三日後に控えた午後、斉義は出仕から戻った義綱へ声を掛けた。

「父上。内密のお話が」

斉義は今回の参詣を一つの好機と捉えていた。

義綱の方でも何やら思うところがあつたようで、重く頷いた。黙ったまま連れ立って奥の間に入り、人払いして対座すると、義綱の方が先に口を開いた。

「百目木を抱き込もうと思う」

義綱の視線が斉義を刺した。

斉義は一瞬目を合わせたが、すぐに落ち着きなく顔をそむけ、ただ頷いた。

義綱の言葉は、斉義の考えと同じだった。だが義綱のような殺気立った目をしていたら、誰でも不審に思うだろう。

内密に重大な話をするときこそ、何気ない仕草をするべきである。斉義は（父は斯様な謀事には合わぬ）と、少々げんなりした。

「父上は直前まで、表立った動きは為さらぬ方が良いでしょう。今晚、私が百目木まで行き、話を付けて参ります」

「何か書こうか」

斉義は頭を振った。

「口上のみの方が、後々安心です。万事お任せあれ」

斉義は、父の関与をできるだけ少なくした方が巧く行くと判断し、そこまで話すと早々に座を立て多くを語らなかった。

その夜、斉義は単身、搦手から徒歩で外出し、百目木城へ向かった。馬で行ったらどうかと義綱に勧められたが、断った。

「馬は音を出しますし、できることなら家人にも内密の方がよろしいでしょう」

塩松中に顔が知られているだけに、注意には万全を期す必要がある。斉義は、勝負の大半は今夜中に決すという覚悟でいる。

家中にて斉義の外出を知っているのは、義綱と搦手の門番のみであつた。

——一刻ほども掛けて、斉義は漸く百目木城に着いた。道中幾度か物音に身を潜めたが、何とか人目に付かずに済んだらしい。

出てきた門番は、訪問者を見るとすぐにそれを斉義と判別した。斉義の側でも、何度か聞き覚えのある声からすぐに相手が誰かを特定した。名は知らぬが、何度か会って挨拶程度の話をしたことがある下男である。

「これは小浜の若君。如何なされましたか」

「折り入って摂津殿に相談があつて参った。内密にお取り次ぎを願いたい」

斉義は「内密」の部分強調しながらも、声を潜めて言った。

門番も小声になり、両手で制するような仕草をした。

「暫しお待ちを」

門口にて言葉通り暫く待つと、再び同じ男が顔を見せた。

「お待たせ致しました。他の番衆を説き伏せて、若君のことを他に知られぬよう根回しをした上で、大殿に直接伺いを立てて参ったので、思わぬ時を喰いました」

「手間を掛けた」

城内に入ると、なるほど、途中の門や通路には一切人影がない。本丸に至って前庭から中庭へ抜けると、一つだけ灯りの点った部屋がある。

門番はその部屋の前の縁に手を付くと、小声で中へ声を掛けた。

「お連れしました」

そして斉義を促して下がった。

障子戸を開けると、一本の燭台の側、目的の男が寝巻き姿で一人正座をして待っていた。

光の具合か、いつもはにこやかな面相が、目つき鋭く感じられる。

「夜分に恐れ入ります」

「いや、夜分にしかできぬ話もあるものです」

「……先ずは、ご息女の懷妊、おめでとうござりまする。もし男子が産まれた暁には、尚義公の後嗣となられましょう」

「松丸君が居られるのでは、ないかな？」

「大内では一族を挙げ、石川殿のお手伝いを致す所存」

部屋の光度に目が慣れてくると、摂津が光の具合などではなく実際に険しい顔をしていることが判った。

斉義の追従にニコリともしない。ただ一瞬目を閉じて小さく頭を下げてただけである。

「それは……。して、備前殿は、否、太郎殿は何をお望みか」

「近く、殿が松丸君を連れて塩松神社へ宮参りをするには、お聴きでしょう。そのとき備中殿が田村を後援として謀叛を起こし、殿を弑し奉ろうとしている、という噂がありましてな。あくまで噂、ですが」

「ほお。松丸君の摂政になって、権勢をふるおうという魂胆でもあるのですかな。備中殿も大それたことを。——いやいや、噂が本当なら、ですがな」

摂津は眉尻を下げ、乾いた笑い声を小さく上げた。

漸く上げたその笑い声も、常日頃の優しさは微塵も感じられない。突き放すような、冷たい笑い方である。

そして少しく斉義の目を見つめて黙った後、全て得心したかのよう
に言葉を続けた。

「――よろしい。承りました。――して、産まれた子が女の子だったら、如何致す所存か」

「いずれにせよ、松丸君の威勢は多く削がれましょう。後ろ盾なくば、実力で家中をまとめ上げるしかない。それができぬ程度の器量と見定めたときには――」

摂津は断定するように、斉義の言葉を遮った。

「それを待つまでもありますまい」

「されど昨今の田村の威勢を鑑みるに、余り弱みを見せれば付け込まれましょう」

「寧ろ我らの方から、田村の懷に飛び込んでは如何」

摂津は一瞬だけ片頬で笑った。

斉義は少しだけ安堵の笑みを浮かべた。

秘めていた本題は、開けて見れば相手と揃いのものだった。だがその笑みは、相手には呆れて洩れ出たものと伝わったかも知れない。

この頃、田村庄三春の田村氏は、隆顕が隠居して嫡男清顕が跡を継ぎ、その威勢は最盛期を迎えようとしていた。

即ち、常州佐竹氏の北進に対抗して会津の葦名氏と共同でこれに当たっていたが、その一方で葦名氏に対しても隙あらばその領地を奪わんと狙っていた。

その後方たる塩松を従えたなら清顕に後顧の憂いはなくなる訳で、内応の声を発せば飛び付いて来るのは必至の情勢だ。

齊義は話の主導権を摂津に持たせ、自分は聞き役に廻った。

「摂津殿貴殿――。何か策でもありますのか」

「……お時間は大丈夫ですか？」

「このような場、そう何度も設けられるものではござらぬ。時間の許す限り、私も腹の中のことを総て出してゆきますので、どうかお心に留め置かれますよう」

「お互いにな」

——斉義が百目木城を辞したのは、空が幾分白み掛けた頃だった。

「長々とお邪魔致しました」

「うむ。早う帰られた方が宜しかろう」

縁に出ると、先だつての門番が前庭と中庭の間辺りから音もなく駆けて来た。

「多少駆け足になります。なるべく足音を忍ばせてくだされ」

「うむ。では」

斉義は摂津に一礼すると、門番の男に続いて駆け出した。

門番は城を出た後も引き続き山の中を先導し、小浜の郊外まで斉義を案内した。

塩松中を知悉したと思っていた斉義にもまるで知らない獣道ばかりを通って行くものだから、眼下に小浜の見慣れた街並が現れるまで、自分が何処にいるのかまるで判らなかった。

終始二人は無言だったが、別れ際に斉義は、一礼して去ろうとしている男へ、声を掛けずにはいられなかった。

「待て。其方……名を何という」

男は立ち止まって少しく躊躇っていたが、間もなく小声で応えた。

「小平とお呼びください。今後百目木からの伝達事項は、それがしが承ることできるよう、お願いしておきます。よってこれから、繰り返しお目に掛かることになるやも知れませぬ」

小平は再度一礼すると、音もなく駆け去った。

齊義は小平のお陰で、何とか日の出前に小浜城へ着くことができた。あれがどのような来歴を持つ男かは判らぬが、あまり詮索せぬ方がよからう。齊義は小平を得体の知れない者と見ながら、その使いでをはじき出していた。

搦手から城内へ入ると、門番から伝言を伝えられた。

「先刻より、お父上様が書斎にてお待ちです」

「……まさか、ここへも」

「はい。殆ど一刻毎に。この口上も、直接に命じてゆかれました」
「……………」

屋敷内へ入ると、義綱の書斎から光が洩れている。どうやら寝ずに待っていたようだ。

しかし齊義は放っておいて、そのまま寝た。高揚した充実感を害したくなかったのだ。

そして翌晩、齊義は義綱に会いに行った。

義綱は、昨夜齊義が戻ってから会いに来なかったことを、言頭にこそ出さなかったが、釈然としない表情ではあった。

齊義としては、昨夜の摂津との会話を今ここで全て語って聴かせることは憚られるが、当面の指示だけはしておかねばならない。

一度、話し合っただけではあるけれども、齊義は、義綱よりも摂津の方が視野が広く、先の展望と対策もしっかり持っていると感じることが多かったからだ。急な訪問にも関わらず、既に全てを諒解していたかのような話し易さも、後から考えれば不自然であり、不気味なことであった。

「昨夜は如何だった」

「宮森参りは明後日でしたな」

「うむ」

「……備中殿に謀叛の噂があります。ご存知でしたか？」

「初耳だが」

「あるのです。そんな噂が」

齊義は睨まんばかりに父を見つめた。

義綱は意を解したのか気圧されたのか、曖昧な返事をした。

「うむ。――で」

「田村を援み、此度の宮参りを好機と、尚義公を弑し奉ろうとの企みになっている由。そこで、決行か否かを田村へ報せる手立てとして、決行の場合にはその前日に、宮森城内から狼煙を揚げて報せることになっているのだ、と言われております」

「何？　ならば、明日それが知られる訳か」

義綱は身を乗り出してきた。

「はい。狼煙が揚がれば、それで噂は本当だったということになります」

「そうあつては、注進に及ばねばなるまいな」

「即刻討ち果たすよう、進言を願います。恐らく石川殿も同席して、口添えしてくれることでしょう。石川殿はそのとき既に塩松城まで兵を伴っておるかも知れませぬ。我らも万全の準備を整えて事に望まねば、功を立てることは叶いますまい。明日は私も、予め中途まで出張っておりますので、合図が入り次第、宮森の城門へ殺到致します。さすれば第一の功は我らのもの」

「合図とな？」

齊義は薄く笑みを浮かべた。

——翌日の午過ぎ、雲一つない晴天である。

義綱は塩松城へ出仕していった。

石川摂津は、百目木から麾下の兵を百人ほど動員して塩松城下に控えさせると、自らも義綱に続いて尚義に謁見すべく、入城していた。

同時刻、斉義は弟の助右衛門親綱を伴い、二十数騎の軍勢を率いて小手道を小浜の街場から南下、宮森の搦手へ二町足らずの地点まで出張っていた。

宮森城内から盛んに揚がっている薄灰色の煙が、空の青に映えている。

この煙は、明日のお成りに向けて城内の隅々まで掃き清めての焚火であり、本来は何ら他意のないものである。

ただ斉義は、手伝いの人足一人を金で抱き込んでいた。ただ目的は告げずに、焚火へ生木をくべるよう命じたのだ。その為に、矢鱈と煙が出ていたのだった。

「兄上、これだけの勢で城を陥とすとは、なかなか豪儀ですな」
親綱は斉義と馬首を並べて煙を見上げ、快活な笑顔を見せた。

「まあ、追って百目木勢も来るだろうがな。それまでに勝負をつけられれば、御の字だ。それでな助ゑ——」

斉義は弟をそう呼ばって、躊躇いがちに打ち明けた。

「儂としても其方に側に居て貰うと助かるのではあるが、何分にも頭数が足りぬ。不本意に思いうかも知れぬが、宮森の街屋敷の方へ廻ってくれぬか」

街屋敷は大河内一家の襲の居住地で、宮森城の西麓、城下の街場に接してある。城の搦手門前から右へ分岐する細道を辿ると、街場に通じる手前に存する。対して大手門へは、城の東側、分岐を道なりに左手へ廻って行くのが最短である。

「……分かりました。まあ、それもまた必要な役目です。ただし、こちらの方に備中殿が居た場合には……」

「うむ。こちらに遠慮することなく、存分に功を取ってくれ」
準備は調った。

あとはジリジリと父からの合図を待つばかりである。

その時、晴れた空に一発の爆裂音が遠くから響いた。

それは義綱が塩松城内の大内屋敷から打ち放った空炮だった。

かねて申し合わせていた合図とは、これである。

斉義が尚義の後嗣としてあった頃、義父から買い与えられた鉄炮が、思わぬところで役立った。

奥州では依然鉄炮はさほど多く入っておらず、塩松にもまだ数挺しかない。当時の義父は相当の無理をして手に入れてくれたのだらうと、斉義はあの頃の甘い生活を懐かしく感じた。

兎も角も一行は、それを合図として一斉に駆け出した。

「ではっ」

申し合わせ通り、親綱は斉義率いる本隊と分かれ、手勢七騎充当の上下を率いて城の北から西へ廻っていった。

目の前には搦手門がある。門番は何事かと狼狽して出てきたが、目の前で左右二手に分かれた軍勢が駆け去って行くのを、口を開けて眺めるばかりだ。

齊義は先頭を切って小手道を更に南へ進み、大手の門前へ達した。無防備に出てきた門番を一刀に倒し、馬出しを一気に駆け抜けると、城内への上がり段に向かって更に鞭を当てた。そして南曲輪を蹂躪して北上し本丸をそのまま通過すると、神社のある北曲輪へと突入。この辺り、城の表構造は概ね熟知している。

神社付近には、明日のお成りに向けての準備に、上下士が十五人程度と人足が五十人ばかり来ていた。

「人足は片寄れい」

齊義は大音声を張り上げ、麾下の下士数名へ人足を一箇所にとめるよう命じた。そして更に神社の境内へ向けて突き進んだ。

この頃になって漸く戦鬨らしい戦鬨が始まった。

されど城兵から抵抗があるといっても、平服と総武装した騎馬武者との対峙では、勝負にならない。

「雑兵は構うな。狙うは備中が首のみぞ」

しかし北曲輪を大方制圧しても、備中の姿が見えない。

報告が入った。

「本丸主館にまだ多数立て籠もっている模様」

「よし」

齊義は身近にいる者をまとめて本丸へ向かうことにした。

敵勢の推移を窺うに、どうやら曲輪間連絡の裏通路から多くの者が逃げたようだ。齊義も流石に城の裏構造までは承知していない。

このとき、搦手門の方から喚声が挙がった。どうやら石川勢が着いたらしい。齊義はその予想外の早さに渋面を作りながら、構わず本丸へ向かった。

本丸主館の門は堅く閉ざされている。

反撃の態勢を整えられては、逆に当方の身が危険に晒されてしまう。

無勢にてどう攻め立てたものか考えあぐねている間に、石川摂津が到着した。そして同時に逆方向から、親綱の使いが訪れた。

「太郎殿、遅ればせながら、ただ今参上仕った」

「なんの。余りの早さに、驚いております。……一寸失礼——」

斉義は親綱の使いから、耳打ちで報告を受けた。

「うむ、分かった。追って沙汰のあるまで、引き続き制圧しておくよう申し伝えよ」

「はっ」

「如何された？」

「備中殿は恐らくこの中の由。街屋敷を制圧した弟からの報告でした」

「左様か。ならば——」

摂津は平生の彼には似合わぬ怒声で以って、門の中へ呼び掛けた。

「備中殿お。中に居られると存ずるが如何っ」

中から絶叫にも似た、若者の大声が聞こえる。

「その声は石川摂津殿と存ずる。備中が甥、宗四郎が代わって返答す。こは如何なる所存かつ。斯様な暴挙に出て、上にどう申し開きをするつもりかあつ」

「こは主命ぞお。其方らの企てし謀略、既に頓挫せり。もはや神妙にされよっ」

門の中がどよめき、更にざわめきへと変ずる。

やがて静かになると、門外では撃って出るかと緊張が高まった。ほどなく門内から煙が立ち始めた。屋敷に火を掛けたいらしい。

摂津が傍らの下士に開門を命じた。どうやら草調義専門の組頭である。

その下士は、門から少し離れた塀際へ寄ると、指笛で短い韻律を刻んだ。

少しして門の辺りから叫び声が響き、内側から通用門が開けられた。門の中から現れたのは、先日百目木城にて斉義を案内した門番の小平だった。

斉義は彼らの一連の行動を見て、その手際によさに気味が悪くなった。それに比べて、自分が人足を抱き込んでさせたことの稚拙なこと――。

ともあれ門内へ突入すると、既に炎は主館を崩さんばかりに燃え広がっていた。

「備中と宗四郎を探せっ」

火の勢いは激しかったが、それでも摂津の下士が数名、館内へ飛び込んでいった。更に館の裏手に見つかった隠し通路から、探索の手も伸ばされた。

摂津が何かと先に立って動くものだから、斉義は手持ち無沙汰に腕を組み、燃え上がる建物を憮然と眺めていた。

後ろから摂津が声を掛けた。既にすっかり相好は崩れている。

「太郎殿、父御がお見えになりましたぞ。どうぞ報告をしてください」

「あっ、はい」

共に門から出ると、義綱が馬から下りたところだった。

「見事な機転でござったな。ご子息も立派に立ち振る舞われておりましたぞ。きっと殿もお喜びになるでしょう」

摂津は義綱に向かって厭味なくそう言うと、北曲輪の方へ向かって行った。「機転」とは鉄炮の件だろう。

斉義は義綱と共に再び門をくぐった。

「ただ今、備中殿の屍体を確認中です。また、備中殿と共に甥の宗四郎殿が城内に居た由。その所在も確認中です。街屋敷の方は助右衛門が押さえました」

義綱は斉義の横に並ぶと、炎を眺めながら頷いた。

斉義もまた、何をするでもなく煙を仰ぎ見ている。

傍から見たら何とも間の抜けた光景であろう。斉義は自分らのことをそう思った。

激しい黒煙は上空で青に溶け、空全体を薄く濁らせている。やがて大きな音を立てて主館が崩れ落ち、熱風が吹き抜けた。顔を背けてやり過ごした後、薄目を開けて見上げると、舞い上がった無数の火の粉が次々と黒い炭に変じてゆくのが分かった。

暫くして、裏通路を捜索に行っていた者が、北曲輪から斉義の所へ報告に来た。

「両名の死亡、確認致しました。ただ、備中殿が首は見つかりましたが、身体の所在は未だ確認されておりませぬ」

「む？ 状況がよう掴めぬ。詳しく話せ」

「裏通路から北曲輪へ出る手前に、地元でクラベ石と呼ばれる大石があるのですが、その石の傍らに宗四郎殿の屍体が転がっていました。口から背中にかけて自らの太刀にて貫かれており、状況から察

するに、剣先を咥えて石の上から転げ落ちたものと思われず。そしてその腰袋の中に、備中殿の首が入っております」

「するともしや、この本丸主館へ逃れる前に――」
「おそらくは。いずれ胴も見つかることでしょう」

その言葉通り、ほどなくそれは見つかった。

否、北曲輪でとうに見つけられてはいたのだ。神社拝殿の中にあつた腹を切った首のない屍体が、衣服や所持品から備中であると結論付けられたのだった。

——夜、小浜城に戻った後、斉義は義綱に塩松でのやりとりを聴き取り、また改めて宮森での経過を詳しく聞かせた。

「塩松城でのやりとりの様子をお聞かせください」

「うむ……。其方の言うておった通りに、備中謀叛の旨を言上したのだが、殿は一向にお信じにならない。そこへ摂津が同座し、二言三言、儂と同様のことを申しただけに、殿はおもむろに座を立たれ、宮森の様子を窺おうと望楼へ向かわれた」

義綱はそれを自分の能力不足と捉えているようだが、恐らくそれは違う。尚義の中で蓄積された備中への疑心が、たまたま摂津の言葉で臨界に達しただけのことであろう。

しかし斉義は、それを義綱に言って慰めることを潔しとしなかった。

「狼煙は見えましたか」

「殿は茫然と眺めておられた」

「誅伐の言上は？」

義綱は一度深く息をついてから、話し出した。

「今回のことで儂は、摂津を見る目が変わった。あれは恐ろしい男じゃ。あの場で殿は、まさに摂津の言いなりとなっておった。殿は摂津の言葉を反復するように『備中が首を挙げし者に宮森を与えん』と仰った」

義綱は思い起こすように暫し黙ったが、気を取り直したように、逆に問い掛けてきた。

「――其方の方の首尾は如何だったか」

「軍勢を二手に分け、助右衛門に街屋敷へ向かわせ、私は大手より攻め入りました。殿は形式を重んじるお方。城攻めは大手からが本来であります」

「しかし搦手も開いておったぞ」

「それは石川殿の所作です。流石石川勢は到着が早かったですぞ。一緒に出発していたら、大きく置いて行かれるところでした。本丸主館を囲んだのは、僅かに我らの方が早いぐらいのものでした」

石川勢の武勇は元々塩松随一との聞こえが高かった。それに、石川領たる日山丘陵は、塩松一の良馬の産地である。

宮森城は南大手北搦手だから、小浜城から攻めるのなら緒戦を搦手にするのが便利である。それでもわざわざ大手から攻め込んだところに、斉義は酔っていた。その一方で、石川勢の熟れた動きに對し、これから共同戦線を互ってゆく仲として、ふとすると一転して危険な存在にもなり得るといふ危惧を感じてもいた。

翌朝、斉義は義綱に伴われ、塩松城へ出仕した。

城内で摂津も合流し、三人で尚義に謁見する運びとなった。摂津は二人を見ると、ニコニコといつもの笑顔を見せた。だが二人とも、その裏の顔を見てしまっている。義綱と摂津が並んで座り、斉義は義綱の後方に座を占めた。

尚義はいつにも増して血色のない顔で現れた。この頃とみに痩せてきて、頬がこけている。それら顔色の悪さも併せて、増え続けている日酒の影響が亮かである。

「大儀であった」

「備中が首は、もう検分されましたでしょうか」

尚義は義綱の上申には答えず、相好を崩して斉義へ声を掛けた。

「大活躍だったそうではないか」

「恐れ入ります」

斉義は平伏した。

摂津が口を開いた。あくまで明るく、朗らかな口調である。

「今回の手柄は、太郎殿に全て持って行かれたようなものですな」

摂津は少し腰を傾け、チラと後ろを見た。ニコリとされ、斉義は逆にゾツとした。

尚義も「そうかそうか」と上機嫌になったが、すかさず義綱が口を開いて、和やかになりかけた雰囲気断ち切った。

「備中が首を挙げし者に宮森を下されるとのお達しでありましたが、我らの駆け付けた時には既に、甥の宗四郎の手によって彼の首は胴と離れておりました。その宗四郎も自害し果てた今、宮森は誰にくだされましようや」

斉義は義綱の発言を浅ましく感じた。自分と摂津のやりとりには不審を抱いていることは窺えるが、それをあからさまに口頭に出すのはいただけない。

尚義も話の腰を折られ、黙ってしまった。

すぐさま摂津が口を添えて、話の進展を促した。

「何卒、太郎殿に賜わってくださいませ。何の働きもしていないそれがしらには、何の恩賞も頂戴する権利がありませんぬ」

「うむ？ 太郎にか……」

尚義は意外な顔をした。

義綱も摂津の顔を見、次いで後ろの斉義を振り返った。顎を突き出し、目は丸かった。斉義は、その意図せぬ滑稽さが、却って不快に感ぜられた。

大内の惣領は義綱であり、大内に下すとなれば、普通に考えれば、それは義綱へ下すことを意味する。されど「太郎に」と特に名指しで斉義へ賜わるということは、斉義が義綱の嫡男であることを鑑みれば、異例と感じられることである。

しかし今後のことを思えば、斉義にとっても摂津にとっても、斉義を義綱から独立したものと前提しておくことは都合の良いことだと、事前に申し合わせが成っていた。

それは、斉義が義綱に説明していない分野のことである。

意を酌んだ斉義が、一気に畳み掛ける。

「私は大内の嫡男でありますれば、戸惑われるのも致し方のないこと。されど今、宮森城を拝領し小浜城を出ることは、大内の家を捨てて別家を立てることには当たりませぬ。私はこの拝領を終生の誇りと為し、忠孝の証しにしたいと思います。よって殿におかれましては、今後私の働きが不足と思われましたれば、いつでもお取り上げられますように」

「う、うむ。そうじゃな。確かに、後々のことを思えば、助右衛門にもよきこととなるやも知れぬ。備前、其方がよければ、太郎に預けてみようと思うがどうか」

「わっ……たくしの方には、異存はござりませぬ」

かくして宮森は、義綱でも摂津でもなく、斉義に与えられた。

斉義は、城内本丸の焼け跡に簡素な居館を築くと、自分の近習を伴い、また家中諸士から新規に部屋住みの者を何名か召し抱え、志保を伴い早々に遷り住んだ。

街屋敷には、長門義員を住まわせた。

事変当時、この街屋敷には、備中の歳若い妾と所生の幼児、そして宗四郎の父母がいた。親綱に屋敷を接收された後、彼らは尚義の沙汰により退去を命ぜられたが、一族の者は皆関わり合いを避けて受け入れを拒否した為、行き場を失ってしまった。当座の措置として一時的に在家の者に匿われてはいたものの、それも長期に亙ることは憚られ、長門が屋敷に入る頃には再び路頭に迷う憂き目に瀕していた。

そのことを伝え聞いた長門は、備中の妾を召して母子の保護を申し入れた。しかし妾は長門主従の面前で罵倒して拒絶し、更に懷刀にて長門に向かって粗相を働こうとしたことから、やむなく子諸共斬殺に処された。

宗四郎の父母は猶も一年、山中にて匿われていたが、斉義や長門が宮森の邑民と馴染み、周辺事情の急激な変化の中で事変が忘れられてゆく過程を目の当たりにして、いよいよ行く末に絶望し、刺し違えて死んだ。

即ち、城下の邑民も始めのうちは新しい領主に対し不信を顕しており、長門が備中の妾と子供を斬ったことから、一時住処を離れる

者もいたが、長門は持ち前の気さくさからすぐに彼らと打ち解け、また同時に斉義に対する不信感も拭われていった。

親綱に対しては小浜を、そして父を頼むと改めて託した。そう確認しておくことが父の為でもあり、親綱の為にもなると思ったからだ。

斉義は、主家からの出戻りとなって以来、親綱はもとより、父からも万事どこか遠慮されているように（思い過ごしと自覚しながらも）感じられ、斉義の側としても、こと親綱に対しては、申し訳ない気持ちがあった。父の後継には親綱が相応しいと斉義は思っており、情深い親綱を父の側に残すことで、今後訪れる筈の難局に向けて精神的な支えになってくれるものと期待していたのだ。

斉義の石橋家中に於ける立場は、依然義綱の後嗣ということから無役のままではあったが、父義綱現役のまま、周囲は大河内備中の名跡を継いで実質的な家老格と見なす者が多かった。

周囲への遠慮からか義綱だけはいい顔をしなかったが、斉義も平然と宿老会議のような場へ出向き、父の名代としてでもなく座を占め、発言するようになっていた。

今回の事変の結果として、松丸の地位には手が付けられず、その母も塩松城にて引き続き起居していたが、かつての威勢はすっかり失せ、追従する者もいなくなった。

ある日、斉義は塩松城へ出仕した際、ふと懐かしさから久しぶりに住吉城の方まで足を伸ばした。「元後嗣」たる斉義なれば、間の門を通過せんとて咎めもない。

相変わらず静かな城内だったが、時折姿が見え隠れする女達からは熱い視線が送られた。

しかし静寂を期待して訪れた斉義には、それは却って煩わしいものでしかない。

斉義は、女達には用なしの書庫に入った。

尚義から賜わった書庫の中身は既に多くを運び出しており、寂しくなった庫内で何気なく手に取った書籍類の題簽を一つ一つ眺めていると、不意に庫外から声を掛けられた。

「太郎様。こちらにお出でと伺い、御方様からお連れするよう申し付けられました。もし今ご都合が宜しければ、ご同道願えますまいか」

声の主は、叔母が尚義の正室に興入れしたときから、その側女として付いている老女である。斉義も尚義の後嗣として城内にいた頃には何かと世話して貰い、こと尚義妾達への手付けの際には裏で少なからぬ協力を受けており、頭の上がらぬ存在だ。

叔母は、斉義放逐に際して義綱以上に反対し、幾度となく尚義へ異見に及んだほどであり、斉義にとってはこれもまた尽くせぬほどの恩義を受けた一人である。

老女について行ってその部屋へ顔を出すと、叔母は急かすように部屋へ招き入れ障子を閉めた。

とうに女としての盛りは過ぎていたが、それを隠すように厚く塗られた白粉が、彼女の老いを却って強調している。決して吝嗇な女ではないが兎に角激昂しやすい性質で、よって彼女からの情報は何であれいつも、言葉に込められた憤懣の分を差し引いて聴かねばならない。

それを判っていても、ただならぬその様子に、斉義は思わず身構えた。

「何事ですか」

叔母は、どう切り出したものか少しく口をモゴモゴさせた後、堰を切ったように喋りだした。

「おことの父は頼りにならぬ。よっておことに頼むのじゃが、道海を討ってたも」

「何のことですか、藪から棒に。道海とは、ご一門の道海殿ですか？」

「道海めは殿に面し、おことらを佞臣とこき下ろしておったのじゃ」

道海とは石橋一門、石橋新助隆則の道号である。彼は文武に通じ、剛直で知られていた。

彼は石橋一門が悉く周囲の流れから取り残されていく中、それらの者共に担がれる形で尚義へ諫言に及んだのだろう。

だが尚義は前々から、一族一門というものを毛嫌いしていた。それは、自らの立場は血筋によるものという意識が強い為、それが通用しない者、こと有能者に対しては、劣等感に苛まれ、接するときはどうしても見下されている気がしてならなかったからだ。

道海はその最たる対象で、一門が彼を担いだのは、その辺りの事情を踏まえると、火に油を注ぐ行為であり、逆効果でしかない。

「我が殿を山口の大内義隆や関東管領上杉憲政になぞらえ、政を佞

臣に任せ、武備を忘れ歡樂に溺れておつては、当家も終には他家の掌握となるだろう、と」

齊義は穏やかな心持ちで聴いている。

叔母はその表情を見てますます苛々を募らせている様子だったが、齊義はその表情すら楽しんでいた。

「なるほど。その佞臣が父や私であると、御方様はお考えなのですか。――して、殿は如何に応対を」

「暫くは黙って聴いて居られたが、おもむろに『君臣をわきまえぬ妄言、不審なり』とお怒りを発せられ、勘当を申し渡し、追い出された。もはや彼の者は主家筋でも何でもない。はや討手を遣わしたも」

「それを父上に言つたのですね。して、父上は如何なる返答を」

叔母はいちいち発言者の口調を真似して見せる。その口調はもともとの発言者に対してではなく、彼女に対する不快感として齊義に伝わった。

だが、込み上げた溜め息は飲み込み、逆に微笑みすら浮かべて、拝聴する姿勢を取り繕っていた。

「『放っておけばよい。殿のお言葉からも、我らが彼らよりも信頼を得ていることが推し測られよう』と言うておつた。されどわらわはそうとばかりは言えぬと思う。我らに好からぬ感情を持つ者は道海のみではあるまい。見せしめの意味でもこれを厳しく処さねば、我も続けとばかりに転覆を企てる者が現れようぞ」

齊義は、（その発想は彼女にしては慧眼だ）と思いながらも、どうしても気乗りがせず、全面的に支持することはできなかった。

「ええと、それはいつのことですか」

「五日ほどになるうか」

「ならばもう遅いでしょう。あの道海殿のことなれば、もう奥州に

は居りますまい。御方様は斯様に仰せられますが、やはりご一門への手出しは周りの聞こえにも障りがござります。よってこのことは、父上の申しておるように放っておくのが宜しかろうと思われます。それでは御方様のお気持ちは晴れぬでしょうが……。一応、消息は探ってみましょう。なに、向かう先にまるで見当が付かぬ訳ではないのです」

齊義は、連座の疑いのある者の多くを一人ずつ呼び出して聴き取り調査を行い、宥恕を引き札に情報を集めた。その目的には、情報蒐集ばかりではなく、一門衆の結束へのてこ入れの意味合いが多分に含まれている。

而してほどなく、道海が出奔に当たって高野聖を同道していたという情報に接し、それを叔母へ伝えると、猶も胸がすっきりしない様子だったが、やっと諦めた。

——夏になり、尚義妾石川氏は、塩松城下の屋敷地にて女の子を産んだ。もとより尚義は大変な喜びようである。

石川摂津は、女子誕生の祝いを百目木城で行いたいと申し出た。

当の幼子は塩松に置いたままではあるけれども、祝宴には尚義と共に大内父子も招かれて、盛大に行われる運びとなった。石橋家の相馬番としての本領発揮として、取り寄せられた魚介類の豪華なことは、塩松では例のないほどだ。

午から始まった宴席は、様々な座興をまじえながら進められ、やがて日も暮れた。

膳が進むと、座が乱れてくる。

齊義は尚義の所へ酌をしに行った。

「この度はおめでとうござりまする」

「うむ。早う孫の顔も見せてくれ」

齊義は笑ってお茶を濁した。勿論、尚義が自分の子供と知っている今日の主役が本当は外孫かも知れぬなどとは、言える筈もない。それを知ったらこの舅はどんな反応を見せるだろう。一瞬だけそんな誘惑に駆られたが、すぐに振り払うと、尚義の盃に重ねて酒を注いだ。

「御方様も仰っておられました。庶子なれど愛しさは変わらぬと。

殿におかれましても如何ばかりのお喜びかと」

「歳からみれば、孫のようなものだからな」

「寝顔など、格別のものでしょうか」

「二六時中眺めても、飽くことのないものじゃ」

「ならば今夜は淋しいですな」

「今宵はおことの寝顔を拝もうかの」

「されば、まだまだ吞まねばなりませぬな」

齊義は戯れ言に笑い、盛んに吞ませながらも、背の先に神経を澄ましていた。

後方では摂津が、齊義同様に順を追って酌をしている中、義綱の所で話し込んでいる。

「備前殿、娘御はそろそろよい年頃と伺っております。我が嫡男も元服を終え、そろそろ室を迎えてやりたいと思うところ。甚だ不躰ではありますが、貴殿の娘御を息子弾正と添わせてはいただきますまいか」

義綱の娘、つまり齊義の妹は数人おり、下の二人がまだ親元に居た。上が十三歳。下は十歳になったばかりである。何処かへ嫁す約束も、まだない。

摂津の嫡男は、先日元服して主君から一字拝領し、弾正尚国と名乗っていた。

条件に非の打ちようもなければ、断る理由もない。

「お話は承りました。されど娘はまだまだおぼこいもので……。また、酒の上で斯様なお話は……」

摂津は嫌なそぶりは鱗ほども見せず、爽やかに笑った。

「これは失礼仕った。私もかなり酔うておるようですな。後に改めて、人を介しお願いに上がります」

そこへ齊義が、義綱の隣にある自分の座へ戻った。

齊義は考えあぐねていた。

摂津との結びつきを強める為には、縁組を成立させるのが良いとは思うものの、長期的な見通しを思えば、思わぬところで足枷になりかねない。石川勢を敵に廻したらやっかいになるだろうことは、齊義は嫌というほど身に沁みていた。

「ああ太郎殿。いまお父上に、貴殿の妹君を当家の嫁に貰えぬもの

かとお願ひしておったところです。何卒、貴殿からもお口添えしてください。貴殿が義兄となれば、弾正も安心じゃ」

摂津は斉義の正面きって「否」と言えぬ心情までも見通して、斯様な挙に出ているのだろう。この男は何気ないふりをしながら、その実、先の先まで読んでいるのだ。

斉義は慎重に言葉を選んだ。

「……お話は、失礼ながら脇から聴かせていただきました。父にとつても大事な娘であり、私にとつても可愛い妹であります。弾正殿と妹が添うことについては、両家にとつて良きことと、それ以上を望むべくもないお話であります。よつて……まあそれとは直接に影響のないことになるのですが、妹に弾正殿がどんな人物か語つて聞かせる為にも、一度腰を据えてお話をしてみたいと思います。……今日は如何されましたか？」

「お話はご尤もです。今日の宴席に向けて、あれにもさまざま手伝わせており、今日のこの席にも末席に居させて貰うつもりでいたのですが、一昨日からどうも風邪をひいたらしく、臥せております。よつて今日ここで会つていただくことはできませんが、近いうちに必ず機会をお作りしましょう。その上で改めて、この話を進めさせていたいただくという事で、宜しいでしょうか」

「それは——お大事に」

摂津はにこやかに二人へそれぞれ会釈すると、座をずらしていった。

「其方どう思う。今の話」

「まあ、そう急いだ話でもないでしょう。そのときになってから状況を踏まえて、こちらから条件を提示していければいいと思います」
義綱は何の疑いも抱かずに納得して、斉義に注がれた盃をすすつた。義綱も尚義同様、酒が強い方ではない。ただ尚義とは違い、下

戸を称してこういった宴席や儀礼以外では一切酒を口にしない。日頃酒を口にしないから、このような席にいつまでも馴染まない。

「思えば、其方と酒を酌むのは久しぶりだなあ。様子を見てみると、すっかり堂に入っていて、儂の出る幕なぞ、もうないようだ」

そう言うのと、嬉しいような淋しいような、はにかんだ笑顔を見せた。

「何を仰いますか。まだまだ父上は必要です。私にとっても、家中にとっても」

齊義は父の盃に酒を注ぎ足した。

尚義は終始上機嫌で例によって強かに酔い、一人で真っ直ぐ立つのもままならぬほどに酩酊した。それにも関わらず、夜半過ぎになると百目木に宿泊するのを拒みだし、塩松城に戻ると言って聞かなくなった。犬可愛がりの幼子達の顔を見たくて、仕方なくなったらしい。

「みどもが同道しますので」

斉義は摂津に申し出た。その発言に対し、別段異を申し出る向きとてない。

出立際、ふと視線を感じ、見ると摂津が身動き一つせずに立っている。逆光で見えぬその視線に突き刺され、（摂津もやはり人だな）と、斉義は苦笑いを禁じ得なかった。

百目木城から塩松城への道は、丁度口太川沿いを下る筋になる。

この道沿いには川の水を導水し、また川そのものを堀代わりとして所要所に砦が築かれ、主要道として整備されている。途中新殿村にある分岐から南へ向かうと杉沢村、その先は田村領である。

隊列は尚義を中央に据え、義綱が先導を執り、斉義が後に備える格好だ。

尚義は、暫くは夜風に当たって心地良さそうにしていたが、やがて馬の揺れに不快感を増したのか、転げるように馬を下りると道の傍らで吐いた。

すぐに気付いた斉義は、すかさず馬を下りて駆け寄った。

「誰か、水を汲んでこい」

斉義は、腰から提げたふすべを外して同道の小者に渡すと、尚義

の背中をさすった。

尚義はその優しい振る舞いに感激したのか、一つずつ思い出すように細かく言葉を発している。

「其方には、済まなんだのう。出戻りと、辛い思いをすることも、あろう。だが、其処を何とか堪えて、松丸を、宜しく支えてくれ」

「勿体ないお言葉。私は大内の家に戻った時点で、石橋家の一臣に立ち返っております。松丸君へ忠勤を尽くすことは、今更申すまでもないことでござります」

「太郎……」

義綱は馬に乗ったまま、周囲に気を配っている。しかし酔っているだけに、馬さばきが常ならぬ様子で、てこずっているようだ。尚義が酔って乱れることはもう日常的になっているとはいえ、主君の醜態を世間の目から遠ざけることは重要事である。

斉義はこれまで見せたことのないほどの甲斐甲斐しさで、身体をピタリと寄せている。

義綱はその仕草に違和感を抱いたようで、頻りに首を傾げては何か言おうとしているそぶりだったが、二人の会話に割って入る機会を逸している風でもあった。

「――其方は、酒が強いのを。顔色も変わらぬし、どこにも、乱れたところがない」

斉義は笑って懐に手を入れた。

「実は酔い止めの薬を手に入れたので、試していたのです。先ず自分で服用してみても異常が顕れねば、安心して献上できると思っていたのですが、どうやら効き目は間違いないようです。今から呑んで悪いということもござりますまい。どうぞお試しください」

斉義は「嚙まぬように」と言い含めおき、包み紙から取り出した大きな丸薬を尚義の口に入れ、丁度戻った小者からふすべを受け

取ると、中の水で飲ませた。

そして尚義を自分の馬に載せて口を取り、再び帰途に戻った。半ば置き去りにされた義綱が、そのまま列の後ろに廻る格好だ。

やがて、尚義は大きいびきをかき始めた。

齊義は、父が自分の仕草に注意を凝らしているように思われ、背中に刺さる視線を煩わしく感じた。それでも、頻りに尚義の身体の傾きを直してやっている、漸く疑心を散じたのか、また元の如く周囲へ注意を向けるようになったようだ。

遠くの闇で梟が一声、ギャーツと鳴いた。

一行は皆驚いて、その声の方向へ一瞬顔を向けたが、尚義だけは眠ったままだった。

塩松城に着くと、齊義は尚義を寢所までおぶっていった。

宿居に布団を敷かせ、寝かせると、尚義はかすかに目を開けて礼を言った、ようだ。

齊義と義綱はそのまますぐに城を辞し、それぞれ自分の居城へと帰途に着いた。

義綱は亮かに眠そうな目をして、表情も動きも全体的に緩慢としている。

父と小浜城下で別れると、漸く齊義は深呼吸して首を廻し、夜空を見上げた。

もう一刻もすれば、山の端が白みだすだろう。夜露の湿気が草と土の香りを運んで、密かに高まっていた齊義の動悸を幾分落ち着けた。（後は、なるようになるだけだ）と。

齊義は宮森城へ戻ると、汗ばんだ小袖を換えて再び同じ大紋を着込んだ。そして周囲の者を下げると、屋敷前庭に出た。

この城に遷ったときはまだ仮屋敷だったが、徐々に建物を普請してゆき、様相は一日一日様変わりしている。この本館の邸宅はもう殆ど完成していて、生活する分には何の支障もない。

広い庭は一角だけ来客向けとして常にきちんと整備させており、それ以外はわざと鬱蒼とさせている。境界には灌木を植え込み、その茂みの先は伸ばしたままの竹林になっている。

齊義は茂みに声を掛けた。

「いるか」

「……ここに」

茂みの中から、小さな声で男が返事をした。姿は見せない。

「――ぬかりはござりませぬか」

「うむ、恐ろしいほどにな……。一つ危惧するのは、公が逝かず、この企てが露見した場合だが――」

「その点のご心配は無用に願います。効き目に間違いはござりませぬ。ただ、末期に若君へ疑いの目を向け、その気持ちを他人へ漏らされた場合のみ、揉み消しに手間が掛かることになります。よって、できるだけ早くお側へ着き、少しでも疑いの芽を摘み取ることが重要になりますよう」

「じきに連絡が来よう。……弾正の嫁に我が妹をという話、進めようと思うのだが――」

「……………」

「縁組の条件に、其方の身柄を申し請けることが加えられるのなら、其方はどうする？」

「それがしは主人の命に従うのみです。百目木の大殿からその旨を仰せつかったならば、そのときより主人は太郎様になります。されど思いまするに、これはさほど急いだ話ではありませんまい。今は目の前のことに集中なされませ」

「うむ。其方の言う通りだ」

声の主は、百目木の門番小平である。齊義に信頼を寄せるようになった石川摂津は、齊義から諒解を取った上で小平を宮森常駐と為し、双方の連絡手段としていた。

近付いてくる足音に反応して、小平が再び気配を消した。齊義が目を向けると、駆け足で宿居がやってきた。

「塩松より危急の使者が」

「通せ」

使者の旨は予定通りのものだ。

齊義はその報告を聴くと、すぐさま馬に飛び乗って駆け出した。山の端が（気のせいか）と疑うほどほんの少しだけ白み掛けている。身体は少し重く感ぜられたが、意識の方は朝風の刺激に覚醒し、一層研ぎ澄まされていくような気すらしていた。

塩松城内は、ほんの一刻足らず前に辞去したときと変わらずに、静かだった。齊義は呼吸を調節して、少しでも気分を高揚させてから、寝所に入った。

尚義の枕辺では典医が脈を取り、その後方では正室たる叔母が、瞑目したまま眉尻を下げて端座している。他に誰もまだ到着していない。

齊義は典医の対面に座り、尚義の顔を見つめた。

尚義は眉間に小さく皺を寄せ、少し口を開けて小刻みに浅い呼吸をしている。顔は土気色で、口元には微かに喀血の跡が拭いきれずに残っていた。

「何者かに附子の類を盛られた模様。……予断を許さぬ状況です」
齊義は懸命に困惑の表情を取り繕った。

「吐いたか」

「吐かれたのは血だけです。呑み食いされたものを吐き出されれば、多少は見込みも出てくるのですが……。診療の始めに吐瀉を試みましたが駄目でした。咳き込むばかりになったので、致し方なく止瀉を投薬しました」

齊義は心象に反する険しい顔を作った。

「——何かお心当たりなど、ござりませぬか」

「……思い当たる節と言えば、百目木の宴席しかない。——おのれ摂津め、謀ったな」

齊義は声を震わせ、尚義の手を強く握った。我ながら演技が拙いと感じたが、目を瞬かせて漸く一条涙を搾り出し、込み上げる感情を抑えているふりをすることに腐心した。

「太郎殿は真っ先に登城して、流石我が殿の身を誰より案じ、忠孝の筋を立てておられる。何卒、百目木に手を入れてたも」

叔母の今にも崩れ落ちそうなほどに高揚した様子を見て、齊義は幾分安心感を得た。

そこへ義綱が息を切らして到着した。義綱は齊義の存在に少しく驚いた表情をした。

叔母がすぐ口を開いてくれるかと思いきや、皆の前で取り乱すのを我慢しているのだろう、口を震わせたまま声を発しない。

義綱はその雰囲気（どうしたものか）とたじろいでいる。

齊義にしてみれば、「一難去ってまた一難」である。すかさず自ら機先を制した。

「父上っ、あな口惜しや。殿は附子を盛られた由。疑わしきは石川摂津。早急に呼び出して詰問せられよ。素直に応じぬときには、討

ち果たすべきです」

義綱はその涙を流しながらの訴えに面食らった様子で、到着第一声として息子へ慰めの言葉を発した。

「太郎落ち着け。其方の言いたいことは解った。追々皆集まってくるだろう。そのときの摂津の様子を見れば、事態は瞭然となろうぞ」その言葉を聞いて、斉義は漸く事態の方向付けに手応えを得た。

その時、尚義が目を閉じたまま口を動かした。すかさず典医が口に耳を寄せる。目を閉じて聴き取ると、義綱を差し招いた。

「大内様、お傍へ」

義綱は枕元まで膝を進め、腰を折って耳を寄せた。

斉義は枕元を父に譲りながらも、そのすぐ隣を占めて顔を寄せた。斉義は動悸が高まり、もし何かまずいことを尚義が口走ったらどう場を取り繕ったものか、瞬時にあれこれ考えを巡らしている。

尚義の声はかすれ、吐く息は饅えた臭いがした。

「備前……太郎……其方らが頼みじゃ――。お松を、松丸を……」

その後は咳き込んで言葉にならなかった。

朝になって、尚義は息を引き取った。

その後、漸くのように続々と家中諸士が参集してきた。

それらの視線を集めて、斉義は嗚咽、激昂し、単身でも百目木に撃ち入らんとする勢いで、みつともないほどに泣き喚いて見せた。その、普段決して見せることのない彼の乱れる姿に、誰もが心を傷めた。

だが義綱だけは、それをたしなめるでもなく、距離を置き冷めた眼をして息子の姿を眺めている。

斉義は、父が自分の様子のおかしいことに気付いたのだと感じ、詳しく問い質されるのを避ける為にも一層激しく哭いて、取り付く島を与えなかった。

頃よしと厠へ立つと、折りよく小平から摂津が百目木を出たとの報。そのまま住吉城へ避難することにした。

そして人気のない部屋に入ると、襖を閉めてそのまま横になり、暫しまどろんだ。

昼時を過ぎて塩松城へ戻ると、摂津は既に帰った後である。

姿を見せた斉義に対し周囲からは、摂津の来訪及びその様子、周囲の冷たい視線の為に居づらくなって帰ったのだらうという憶測まで、訊きもしないのに繰り返し事細かに語られた。

それらの視線は、斉義の反応の機微を捉えては、（疑うべきは寧ろ……）と語っているようにも窺われる。

それは杞憂と念じながらも、話の内容がつまらなかうとくだらなかうと、斉義は再び頻りに激昂して見せた。念の入ったその行為は奏功し、内心ではそれまで一概に摂津を疑うのはどうかと考えていた者までもが、斉義に同調していった。

その風潮が一人立ちしたと判断するや、斉義はケロリと態度を一変させて怜悯な面を遠慮なく出すようになり、確実に同調した者共を集めて、その晩から謀議を催しだした。

それは次第に規模を大きくしてゆき、二七日の頃には義綱を始めとする家老衆や、斉義の台頭にいい顔をしていなかった筈の一門衆までも取り込んで、殆どが参加するようになってゆく。

その中で義綱は、筆頭家老ということもあって謀議の中心となるに相応しい存在ではあったが、積極的に参加しているようには窥えず、どこか距離を置き、場に一応顔を出しているだけといった風である。

斉義はその様子に、父は腹の中にまだ釈然としないものを抱えているなど感じ、ぼろを出さぬ為にも余り彼の様子には触れずにおいた。

斉義は尚義の弔い合戦と称し、早い時期に石川討伐の軍を催すことを提案した。

石川家は既述のように、大身であるが家格は高くない。譜代の者で固められた家老衆の中に、彼を弁護する者はいなかった。また摂津の方も、以降出仕していない。田村に後援を頼んでいるとの情報が、噂として流布していた。

謀議は、石川摂津が田村と完全に癒着する前に切り取れるだけ切り取りたいという思惑もあり、七七日の喪が明けたときを出陣の日と定め、一斉に百目木を目指すことになった。一応、松丸を総大将に仰ぎながら、陣代には順当に義綱が推された。

義綱は「お聴きいただきたい」と前置きして、話し始めた。

「それがしは亡き尚義公の家老として、主君の横死を誰よりも無念

に思います。一時は殉死も考えました」

周囲にどよめき起きた。斉義は誰よりも速く、強く反応した。

「父上。お気持ちは痛いほど解りますが、どうか早まらないでください。遺される者の身にもなって、自重くださるよう、お願い致します」

「そうです。一同、太郎殿と気持ちは同じですぞ」

その言葉に、義綱は周囲を見廻して大きく一礼した。

「それがしもご先代静阿公逝去の折、父義生に殉死され、苦勞した覚えがあります。我が子可愛さと思われるかも知れませぬが、嘲笑われるのを覚悟で、もう少し生き長らえたいと思います。先ずはそれについて、お許しをいただきたい。ついてはこれを一つの区切りと考え、今回の陣を一期として、嫡男太郎左衛門に家督を譲りたいと思います。そして余生を次世代の為に、そして尚義公の菩提を弔って生きたいと思う所存であります」

誰からとなく、歓声が沸いた。

斉義は、父が自分の意に適った言動を執ったことに満足し、彼を称える周囲の者に対し、繰り返しお辞儀をして応えた。

七七日の喪が明けたその日、百目木へ攻め入る軍勢は総て新殿砦に集結し、出陣の号令を今や遅しと待っている。

本陣にて出陣の儀が執り行われると、馬に乗り込んだ斉義の傍らに、義綱が寄って来た。

先陣は斉義が請け持っていた。自ら志願し、誰もがそれに同意したからだ。

「父上、行きます」

挨拶した斉義に対し、義綱は浮かない顔をして、恐らくずっと腹の中に溜めてきたのであろう質問を、意を決したように浴びせ掛けた。

「其方あるとき、宮森攻めに先立って、百目木で何を話してきた。まだ何か、隠していることがあるのではないか」

斉義は苦笑いを浮かべた。

「……流石父上。隠しおおせませぬな」

「茶化すでない。腹の中のを全部出してゆけ」

「……父上には申し訳なく思いますが、この戦さ、負けますぞ。お互いどれだけ被害を抑えたまま決定的な局面を作り出すかが、この陣の課題ですな」

「どういふことだ。……お互い？」

斉義は微笑を浮かべたまま、父を見下ろしている。

義綱は諦めたように話題を変えた。

「――それからもう一つ。百目木の宴席の帰り、酔い止めの薬を吞ませたな」

「……ええ」

「あの薬は、——何だったんだ？」

斉義はひとしきり馬のたてがみを撫でた後、呟くように言った。

「……公は私に、ご先代の思い出を繰り返していただきました。天文の騒乱の折、諸家内紛が起らなかったのは、ご先代の塩松のみであったと。——公の、家中の者の心中を把握しようという志は、誰にも劣りますまい。周囲からは暗愚と陰口を叩かれながらも、あの方はあの方なりにお家のことを考えておられたのです」

「何を言うておる。質問に答えよ」

「……尚義公は、酒がお嫌いな方でした。酒を呑むと、周囲の者の心底が見えてくるのでしょうか。つまりそれが、あの方にとっては現世——」

斉義は空を見上げた。一面薄い雲に覆われている。

「素面でいるとき、公の目には、人々の姿は幾重もの虚実をまとった、この世のものとも思えぬ妖怪変化に映っていたのです。だからあの方は毎日、苦しみながらも酒を流し込み、真理を見極めようとなさっておられた。……あの方にとっては、素面の状態こそが、世人が言うところの酔っ払った状態だったとは言えますまいか——」

斉義は父の目を見つめた。義綱は避けるように目を伏せた。

「だから私は、酔い止めの薬を差し上げたのです。とめどなく訪れる、酔いの苦しみから解き放たれるように」

「やはりお前が……」

はっと目を上げた義綱に対し、斉義は一瞬だけ満面の笑顔を見せると、馬に鞭を当てた。そして、尚義を載せて馬の口を取った道を、あの夜とは逆に向かって駆けていった。

斉義が軍勢を率いて出撃すると、申し合わせたように百目木城から石川摂津の軍勢が、迎え撃つべく出てきた。塩松勢がそれを正面

から突き崩して一気に蹴散らすと、百目木勢は捨て首数級ばかりを献じて撤収し、城門全てを堅く閉ざした。

百目木勢が撤収を開始すると、斉義はわざと追撃に勢いを減じた。塩松勢は百目木の街場を占拠するも、既に街屋敷は総てもぬけの殻である。

「長期戦ともなれば、田村のこともあり、何かと分が悪い」

斉義は独断で撤退を決定し、諸将に伝達した。長滞陣しては、街場に火を点ける族が現れるだろう、という懸念もある。

続々出陣してくる本隊は、到着するかしないうちに戻る運びとなり、状況が掴めず諸将混乱している。それを尻目に、斉義は手勢を率いて新殿砦へ戻っていった。

塩松勢が撤退を始めると、百目木勢は門を開けて追撃に飛び出してきた。

斉義から取り残された形の塩松勢は大混乱となり、総崩れとなって新殿砦へ逃げ込んだ。この追撃にも執拗さは微塵もなく、従って幸いにも兜首は揚げられなかったが、捨て首十級余りが犠牲となった。

そのまま摂津は杉沢に陣を張り、三春へ使者を送った。出陣要請の類でもあろうか。

斉義は帰陣すると、すぐさま父へ面会を申し入れた。義綱は結局、砦を出ることすらないままだ。

義綱は不機嫌な顔で迎えた。

先ほど斉義が話した事々を受け、摂津が濡れ衣だったことは父にも判然としただろう。しかし、それを今更諸将へ打ち明ける訳にはいかないし、既に開戦してしまった百目木討伐を覆すこともできない。

また、現況を招くまでの過程に於いて、摂津の方にも幾つか不自

然なふしがあることにも、気付いているに違いない。

父が混乱しているだろうことは、斉義には充分に想像がつく。自分のことを、得体の知れないものと見ているのでもあろう、とも。

「其方、何を考えて一人戻りおったか！」

義綱は珍しく大声を上げた。自ら先陣を名乗り出ておきながら、戦陣をほったらかして戻ったとあっては、本人はもとよりその父にとっても責任問題である。

だからこの叱責は当然のことであり、斉義もある程度覚悟はしていたものの、やはり気分の好いものではなかった。

とはいえ、斉義は出陣前に言い置いた筈だ、「この戦さ、負けますぞ」と。自分の行動を一向に理解しない父に対して、彼はいらつきすら感じている。

だから、幾分怒気を含めた口調で発言した。

「田村が塩松へ出兵する、という風聞がある昨今、如何にしてお家を保つか、という岐路に我らは立っています」

義綱は「其方……」と少し語調を濁らせた後、一拍置いて問い掛けた。

「確認しておきたい。今言ったお家とは、どの家のことだ。石橋か、大内か」

「……塩松です。我々は塩松殿の名跡を守る為に存在しています」
「尚義公の後嗣は松丸君である。其方は松丸君を奉り、守り立てることこそが命題であると存じておるのだな」

「勿論です。その上で、岐路に立っていると申しているのです」

「――して、如何にすべきと申すか」

「早急に三春へ使者を遣わすことです。松丸君に三春へお遷りいただくことも、視野に入れて貰いたい。今ならば家中に反対の者は少なかりうと思います。加えて、田村麾下になったとて、今ならば塩松の権益が侵されることもまずあり得ませぬ」

義綱は表情を固めたまま、肩を怒らせ、息を止めた。

怒号が飛ぶかと斉義は首を竦めたが、義綱は静かに返答した。

「……わかった。早速、合議に掛けよう。三春への使者には、其方が発つのだろう」

義綱は最後に斉義をひと睨みすると、座を立った。

田村清顕からの使者が杉沢の陣を訪れ、摂津が田村を後ろ盾として手を結んだ、ということは、既にかなり信憑性の高い情報として入っていた。

即ち今後、摂津と敵対することは、田村と敵対することになる。

田村の麾下に入るということは、摂津と和睦することになる。

義綱の「田村に降伏」という提唱に、集まった諸将は一瞬どよめいたが、状況を思えば無理からぬことと、斉義の予期通り、すんなりと受け入れる者が多かった。石川摂津に対してすら簡単に負け戦さをするようでは、威勢盛んな田村になど勝てよう筈もないという

ことである。反対意見は、やはり一門中から多く出た。されど一門でも意見は分かれ、岩角玄蕃などの有力者が義綱の援護に入り、最後まで反対していた大場内美濃と寺坂三河が途中激昂して席を立ったことから、議題の重大さの割に会議は短時間で決した。

その夜、大場内と寺坂は密かに松丸を連れ出し、領外へ脱出した。

翌日、斉義は三春へ赴いた。

「儂が田村大膳じゃ」

「大内太郎左衛門でござります」

田村大膳大夫清顕は身体が大きく、伸ばした髭鬚ともあいまって、如何にも武辺一辺倒という印象の容貌であった。年齢はもう壮年に差し掛かっていたが、子供は数年前に産まれた娘が一人いるきりと聞いている。この分では、いずれ婿を迎えることになるのだろう。

「父備前義綱は此度の一件の責を一身に引き請け、隠居の意を申し出ております。松丸君は大場内美濃らに伴われ、相馬へ逃れたとの由。もはや塩松は田村殿の検断にお任せ致しますれば、これまでの経緯はどうか水に流されるよう、お願い申し入れます」

「塩松殿の後嗣、松丸殿が逐電となった今、塩松の主は御辺であろう。松丸殿の産まれるまで、御辺は尚義公の後継者だったのだからな。塩松殿たる御辺が田村の麾下に就く、そう捉えて把握して宜しかろうな」

どうも清顕は、名家たる塩松を武力で以って制圧したのではなく、自らの威徳に屈したのだとしたいようだった。

斉義は、そのようなことはどうでもいいと思っている。今はただ、

清頭の機嫌を損なわぬようにと思うばかりで、ただただ平伏していた。何より先ずは、所領の安堵が最善の策である。

清頭は満足そうな顔で髭鬚を揺らし、大仰に笑った。

「田村の麾下に就くに当たって、其方に『頭』の一字を与えよう。備前頭綱と名乗るがよい。当面は塩松家中の内、石川摂津を除いては、其方の麾下と為してその下知に任せよう。石川には現在の所領に、塩松の蔵入から二・三の地を加増してやり、其方と同格の扱いとする。詳しくは追って沙汰致す。異存はあるか」

「仰せのままに」

かくして斉義は頭綱と名を改めて大内家当主となり、塩松三十三郷の内、石川領として新殿砦より東方の七郷を除いた地域の裁量を任せられた。

松丸が逐電した以上、頭綱を尚義の後継と見なすことに異を唱える者も既になく、石橋家中だった者は一門や家老といえども、頭綱の麾下ということになった。

頭綱は基本的に宮森城に居り、用向きのあるときだけ三春へ赴くという姿勢を許された。当面は誓紙を提出するのみで人質を差し出す必要も求められず、思惑通りの冊封体制に組み込まれた訳である。

その一方で頭綱は妹を石川弾正に配し、形の上でもこれと和睦した。だがこれは、既決事項の履行に過ぎない。この山場を越えおおせてしまった以上、もう誼みを強める益もないのだから。

以降両者は田村麾下の新参者として同列に立ったことから、周囲からはことあるごとに比較の対象とされるようになる。更には、清頭から可愛がられた弾正が、何かと大身の頭綱に対抗意識を燃やすようになりだすと、やがて両家中総じて訳もなく牽制しあうようになった。

その為、交流も疎遠になってゆくことになる。

顕綱は三春から帰って、大方狙い通りに事が運んだことに満足していたが、正室志保姫に対してのみ、心を傷めていた。

志保にしてみれば、夫は晴れて塩松殿となったものの、父は横死し、異母弟は逐電して、実家は他家の掌握となってしまう訳である。

顕綱は顔を合わせづらかったが、やはりきちんと話しておくべきと思い、諸士を塩松城に集めて新体制を布告した後、会いに行った。

顕綱は尚義の養子としてその側近くにいた頃から、この主筋の妻に遠慮することなどなかったから、いま主家たる石橋家がなくなつたとして、彼の妻に対する態度に変わりはない。

ただ、既に彼女の存在は「是も非もなく在るもの」ではなくなっていた。

志保の方でも夫に対する信頼は揺るぎないものとなっており、此度彼がしでかした行為を咎めるでもなかったが、それでもやはり一連の不幸には心を傷め、ときに塞ぎ込む日もあった。

顕綱が部屋へ入ると、志保は柔らく目を細め、小さく口唇を上げた。それは新婚当初から、どんなときでも彼を迎えるときに見せている表情だった。

顕綱は、自分はこの表情に甘えているのかも知れぬと感じた。

「元氣そうだ」

「お帰りなされませ。今日は気分が好うござります」

「父が隠居し、儂が新たな惣領となった。そして、田村殿から一字拝領を賜わった」

「何と付けられましたか」

「備前……頭綱だ」

「左様、ですか。——おめでとうござりまする」

志保は柔らかな表情のまま、目を伏せた。

齊義の名は尚義が付けたものだ。そして頭は田村の通字、綱の字と備前は実父義綱を継承するものである。志保は夫から実家の痕跡が消えてゆくのが淋しかったのだろう。頭綱はその気持ちがよく掴めていた。

「なに、すぐに慣れる。それに、死ぬまでこの名でいるつもりもない」

慰めになると思えなかったが、他に言葉が浮かばなかった。

勿論、言葉の通り、いつまでも田村の下風にあるつもりはなかったし、時の変遷如何によつては、逆に自分が田村を呑み込む機会もあると思っていた。

志保は表情を崩さぬまま、ただ小さく「はい」と答えた。

頭綱は婚礼当初からこの正室の所へ頻繁に通うということはなかったが、それは多分に彼女の身体を氣遣つてのものだった。上から下まで痩せぎすの身体に、肌は白いながらも艶やかさは感じられない。顔の造作も端整とは言えず、その身体にかきたてられるものが少ないという理由もまるでない訳ではないが、毎晩通つては彼女に無理を強いているようで、それが足を遠ざける大きな理由となっていた。

そんな彼女に遠慮している訳でもないのだが、これまで他の女に手を付けることがあっても、熱を上げて入れ込むということは一切なかった。

「どうか側室でも置かれなされませ」

いつも志保はそう言うものの、頭綱は別段子供が欲しいと感じて

いなかった。いま子供ができたとして、どこぞへ人質に出さざるを得なくなるのは目に見えている。情に流されて身動きが取れなくなるのを避けたかったのだ。

「なに、子はまだいらぬ。戦乱の世が終わり、平和な時が来たら、幾らでも作ればよい」

「その頃には私はもう……」

「何を言う。それを言うなら儂とて明日をも知れぬ身だ。だが今それを言うても詮なきこと。其方も気弱なことは申すでない」

この場ではそう言ったものの、顕綱は暫くして幾人か妾を囲った。しがらみを避ける為、いずれも身分の低い女だった。一年経ち二年経ち、顕綱は三男一女を儲けた（うち一女は早世）。

志保はしばしばどこか儂げな表情をして薄幸を匂わせていたが、その分、微笑んだときに顕綱は救われたような気になった。だから志保が「子供が欲しい」と言えば、どこぞより知らぬ子供を拐してでも連れてゆきたいとさえ思う。だが彼女の望んでいるのが塩松殿の後継者である以上、誰でも良いという訳ではなく、少なくとも顕綱が父親である必要があったのだ。

子を産んだ妾達は出産後幾許もなく、顕綱からなにがしかの金子を渡されて放逐となった。

やがて案の定、三春から人質を差し出すよう強要されて、長男三右衛門は田村清顕の側で育てられることとなった。そして次男以下も塩松城にて尚義後室の許に置かせられた。

結局夫婦の手許には一人も残らなかったが、「子息がいる」という事実だけで志保は安堵したのか、明るい表情をすることが多くなったと顕綱は感じていた。

それでも志保は、以降も寝たり起きたりの状態から快復することなく、仮令子供を手許に置いたとして、満足に育てることなどでき

なかっただろう。

ともあれ頭綱は彼女の薄幸が重なるほどに、いたわろうという気持ちが強まっていった。

妾をすぐに放逐したのも、総て志保への配慮だった。彼女が愠気を起こす筈はなかったが、そうしなければ頭綱の気が済まなかったのだ。

だが夫婦仲が睦まじくなるのと反比例するように、子供達はその育てられた環境の故か、一向に頭綱や志保に懐かなかった。

中でも尚義後室の願いを叶える形で石橋姓となっていた三右衛門は、周囲から塩松殿の後継者と見なされ、清頭の膝元で育てられただけに、実父たる頭綱に対してもどこか尊大に振る舞うことが多くなっていた。

塩松・住吉両城は構えこそ維持されたものの、維持に手間のかかる屋敷類は徐々に廃棄され、一砦としての位置付けと化していった。これらの処置は、あくまで石橋家の家名維持が目的である。既に政治的な権限は何も残されておらず、家の再興など絵空事だということ、誰もが知っていた。そこに、「松丸逐電は放伐ではないか」という、外聞の悪印象を拭う効果が期待されていることも。

それでも、頭綱の一連の行動が決して自己利益ばかりを求めたものではないという認識が浸透していたことから、総じて家中は頭綱を中心にして一つにまとまる結果となったのだった。

即ち以降、頭綱は田村麾下の末席にて忍辱の日を送ることとなる。幾度となく出陣し、魁軍殿軍と無双の働きを為しながらも、田村家中での扱いが重くなるということは一切なかった。それでも頭綱は、清頭の下知に只管従い続けた。

小身の者や時として身分の低い者からまで、降将と見下されなが

らも、それに耐え続けられたのは、志保の微笑みが糧としてあったからであり、勿論全ては先行きに期するものがあるからこそであった。

——数年が経過し、元号は天正に変わっている。

「三春よりご使者です」

小姓の報告に、顕綱は頷いた。

大方、出陣の命令か使者に立てということだろう。いずれにせよ、また何か面倒を押し付けようという魂胆なのは、目に見えている。

顕綱は既に、大抵のことでは狼狽せぬほど様々に場数を踏んでおり、どんな無理難題を押し付けられようと、もはや清顕の思考程度の嫌がらせでは、対処に困るような場面に出くわすことも殆どない。それに、他領にて使命を果たせば果たすほどに内外にて名声が高まったことから、それら権柄尽くの無理強いも、結果として顕綱にとってはあながち無駄ではなかった。

しかし、やはり煩わしいことには変わりがない。

田村の人間は、総じて外交下手だった。

今は威勢が盛んであればこそ、何もせずとも周囲から擦り寄って来るのである。そこに胡坐をかいていては、やがて時世から取り残されるのは眼に見えている。

しかしそのことに気付いている者は、どうやら三春にはいないようであった。

対面すると、使者はいつものように尊大なそぶりでおもむろに口を開いた。

「二本松と大森の諍いは聞いておろうな」

「はあ……」

「此度、三春の殿がその調停に立たれることとなり、貴殿にその取

り扱いを命ぜられた」

使者は清頭の書簡を差し出した。

顕綱はそれを押しいたadaki、目を通した――。

信夫郡大森城の伊達兵部大輔実元は晴宗の弟で、幼名時宗丸、天文の乱の導火線になった男である。かの戦乱にて父植宗に従った彼は、乱の終結後も越後上杉家に入嗣することなく、晴宗の支配から半ば独立した存在として、信夫郡の大半を領してきた。

しかし永禄末年頃から、それまで同じく元植宗党として良好な関係を持続させてきた二本松の畠山修理大夫義国との関係が、急激に悪化する。その結果、義国が信夫郡南端の八丁目城を陥落させ、更に北上を窺う姿勢を見せた。

窮地に陥った実元は、信夫郡杉目城の晴宗へ助けを求める。

晴宗は米沢の輝宗に執り成し、その結果実元は、晴宗の娘を正室に迎えることで、実質的にその麾下の列に復した。

輝宗の後援を取り付けた実元は、義国に対して反撃に転じ八丁目城を取り返すと、更に二本松城を窺う姿勢を見せた。

こうなると義国に勝ち目はない。

今度は義国が、窮地を脱するべく周辺諸氏に調停を求め始める。

天正二年（1574）のことである。

先ず会津の葦名盛興を頼った。

盛興の母は輝宗の伯母、盛興の正室は輝宗の娘（実は妹）である。しかし、盛興は少し前から病臥となっており、盛興の父盛氏が大御所として健在とはいえ、とても他領のことなどに構っていられる状況ではなかった。

義国が次に頼ったのが田村清頭だった。清頭の母は輝宗の叔母で

ある。

清顕はこれを、二本松を傘下に取り込む機会として、顕綱に全権を委ねた。

この役目が家中で最も相応しいのは立地的に彼を擱いてなかったし、能力的にも申し分がなかった。そして更には、もしも失敗した場合には、彼に責任を負わせることもできる訳だ。

また、ほどなく葦名盛興が而立にも至らず死んだと公表されたことから、田村と会津との間に位置する安積郡周辺でも、緊張した雰囲気満ちて予断を許さぬ状況となっていた。

その為、清顕としても、葦名への対応で何事か起こったときにすぐ反応できるよう態勢を調えておく必要がある、二本松にかかりきりになっている余裕がなかったのだ。

頭綱はすぐさま二本松と連絡を取り、義国を宮森へ招いた。

二人はこれまでも何度か面会している。頭綱は義国の嫡男義綱の方が歳が近かったが、そちらとの面識はまだない。

畠山義国は、天文の乱で活躍した家泰・義氏兄弟の従弟である。

戦陣で相次いで夭折した従兄の跡を若年にして受けて以来二十五年余、斜陽の名門を何とか保ってきたものの、ここに来て存亡の危機を迎えていた。

義国は顔中に皺を寄せて、神経病みか体調が悪いのか、病的に疲れた顔をしている。

「どうやら苦勞なさっているご様子」

「執り成してくれるのは、もう大内殿を擱いてありません」

頭綱は、義国の言葉をわざと意地悪く取り、反応を見た。

「……私なんぞの対処では、心許なく思われるでしょうが、できる限りのことは致しましょう。それに、塩松とて状況は大して変わりませぬ。今後はお互い存分に協力体制で以って、事に当たって参りたいものですな」

義国は慌てて取り繕った。

「どうか気を悪くしないでください。貴殿を塩松殿と見込んで、たつてお願いしているのでござる」

この男は、これでおもねっているつもりらしい。

「解っています。二本松と塩松の結びつきを深める為にも、ご嫡男に私の妹を添わせては貰えますまいか」

義綱の末娘も十五歳になっていた。

往古ならいざ知らず、今の畠山家と縁を結んだとて何の後ろ盾に

もならないが、それでも大内の家にとっては、充分に箔を付ける効果期待された。

義国には断ることはできない。顕綱との仲が反故になっては、完全に八方塞となってしまふからだ。嘘でも喜ばねばならない局面だということくらいは、流石に分かったらしい。

一瞬逡巡した後、顔を歪めた。

「それは願ってもない」

顕綱は義国の引きつった笑い顔を見て、自分も笑った。名門も落ちたものだ、と。

顕綱はその後、杉目まで行った。

当地で晴宗は伊達家にとって仙道地方の窓口となっており、義綱はもとより、顕綱も懇意となって幾度も面会を果たしていた。

晴宗の顔からはかつての険しさは消え失せ、微笑みは柔らくなっていた。幼い頃に一度対面した植宗にそっくりな印象だ。ここ数年で急に歳を取ったように感じられる。弟の実元が完全に家中へ戻ったことに、安心していてもあろう。自分が引き起こした家中分裂を、元の鞘に収める形で收拾をつけたのだから、さもありなん。

晴宗は「米沢へ直接訴えた方が、話が早かろう」と提案した。

そこで顕綱は、その足で米沢を訪れ、輝宗と面会する運びとなった。伊達氏との交渉事はこれまで何度もしてきたが、大抵杉目で用が足りており、輝宗に会うのは、実はこれが初めてである。

つまり顕綱は、米沢の城下町を目にするのも、これが初めてだった。

塩松や二本松、或いは杉目や三春にだって、城下に街場は形成されている。とは云えそれらはいくまで家中の屋敷地の集まりでしか

ない。

対して米沢の城下には、職人や商人といった侍ではない身分の者が多く集住している。

これは塩松では不可能だ。顕綱はそう思った。伊達家の経済基盤は優に塩松を十倍する。さればこそ、この街場の住民にたづきを与えるのだ。

この街場に対して顕綱は、羨望の気持ちもないではないが、ここはあくまで別の天地との感情が支配的ではあった。恐らく物見遊山と同類のものである。

街場の中心たる米沢城とて、さほどの堅牢という感じでもない。

それでもこの活況を呼んでいるのは、やはりここが他領から隔絶した地勢だからだろうというのが、顕綱が初見で導いた見立てである。

杉目から板谷の山並みを越えて、漸く伊達家の中心地に辿り着くのだと考えれば、山向こうからはるばると攻め寄せようなぞ思いもよらないことだ。本貫たる伊達郡を離れ当地へ本拠地を遷した、晴宗の慧眼を称える他はない。

「大内備前殿だな。其方がことは幼い頃より、父から繰り返し聞かされておった」

「お初にお目にかかります」

輝宗は背が高くないが、父親の若い頃同様、眼差しには厳しさがあがり、顕綱と大して歳が変わらぬ筈であるが、大層な風格を備えている。

顕綱は少々緊張しながらも、弁舌を振るった。

「――畠山に異心なきことは、私が保証します。修理殿が仲違いしたのは、伊達麾下としての兵部殿ではありません。先だって兵部殿が正式に米沢殿の麾下に入った以上、金輪際衝突することはござりませぬ。此度、伊達殿の下知によって兵部殿が八丁目城を攻落したことは、逆に伊達殿にとっては余り外聞の良きことと思えませぬ」

輝宗は意外なことを言うと思ったのか、目を丸くした。この表情は晴宗とはまるで違う。恐らく美人の誉れの高かった母親（磐城重隆の娘）の血だろうか。

ともあれ顕綱は、その表情の変化を見て、口が滑ったことに気付いた。

「……それは田村殿の――」

「申し訳ござりませぬ。独断の見解です」

顕綱は手を付きながらも、この局面を切り抜ける口上を幾つも頭の中に準備した。

輝宗は目を怒らせながらも、口を笑わせた。

「……此度の戦さは兵部の私闘だ。其方の口上では八丁目も畠山に

返さねばならぬようだが、彼の地はそもそも伊達の領分。これは返さぬが、其方に免じて二本松はそのまま安堵してやろう」

輝宗は腰を上げた。そして去り際に立ち止まると、唾然としている顕綱を悪戯な目で見やった。

「――其方にとって、田村の居心地は悪かろう。まあ、だからといって、儂の許へ来ても大差はなからうがな。客としてなら歓迎しよう。いつでも遊びに来るがいい」

そう言うと、輝宗は笑いながら退出した。

顕綱は輝宗に対し、敬愛の情を覚えた。

威儀を保ちながらもどこか飄々としており、発する言葉も、過ぎるほどに大胆かと思えば、心の機微に突っ込んでくる細やかさをも持ち合わせている。自分のことを全てお見通しなのではないかと、気味悪さすら抱くほどだった。

亮かに、猛々しいばかりの清顕とは違う。遠い関係にいれば親しみを感じるのが、近くにて利害関係を結んだら危険かも知れないと感じた。

顕綱は、輝宗の使者に伴われて大森城へ赴き、実元に交渉の結果を伝えた。続いて二本松へ戻り義国に次第を説明、そしてその後、義国を伴って三春まで出向き、揃って清顕に報告する運びとなった。

「備前、大儀であった。二本松殿、これでひと先ず安心でござろうかな」

「何とお礼を申し上げてよいやら」

清顕は上座でふんぞり返っている。

義国は相変わらず疲れた顔で微笑み、顕綱を向いて改めて深くお辞儀した。

「――備前殿はまさに恩人でござる」

清顕はぽかんと口を開けた。

頭綱はその仕草を見て笑いが込み上げたが、ぐっと堪えた。そしてまんざらでもないという顔で少し困った仕草をして見せ、清頭に寛恕を促した。

清頭は顔を歪めて苦笑しながらも、度量のあるところを見せている。

「……う、うむ。そうでもあろうの。備前、これからも二本松殿に協力してやれ」

「はっ」

「……」

頭綱は二本松まで義国と同道し、そこで歓待を受けた。

義国は今回の一件ですっかり頭綱の処世に感じ入ったようで、小浜から嫁を迎える話もいつからかすっきり乗り気になっている。

二本松城では、事前に連絡を受けていた義国の嫡男右京亮義継が、饗宴の用意をして待っていた。

義継は長身で紅顔の美青年である。まだ二十歳そこそこでもあり、将来的にどのような当主になってゆくのかは分からぬものの、家中の者は皆、前途洋々たる思いで彼に全面的な期待を懸けていた。勿論その思いは義国とて同じだろう。

「此度、備前殿のお陰を以って所領を保つことができ、また備前殿の妹御を当家の嫁に迎えることとなり、これで内外共に一つの山を越えおおせたと言えましょう。これを機にそれがしは一線から身を引き、後見として家を支えてゆきたいと思えます。備前殿に於かれでは、今後、義継の義兄として宜しくご鞭撻を賜りたい」

「勿論、私にできる協力には、力を惜しみませぬ。お互いに力を合わせてゆきたいものですな」

かくして二本松は、修理大夫義国が引退し、右京亮義継が当主となった。

義継はほどなく頭綱の妹を正室に迎え、間に男子を二人儲ける。このうち嫡男に生まれるのが、二本松畠山家最後の当主となる梅丸である。

——二年が経過した。天正四年秋。

顕綱は約十五年ぶりに伊具郡へと手勢を伴った。やはり清顕の名代としての出兵で、伊達軍の出兵に参陣する為である。

植宗と懇意だった相馬氏は、永禄八年の植宗死後、その遺志として遺領保有を主張、漸次出兵して丸森・金山・小斎各城を占拠していた。

それに対し輝宗が満を持して出兵したのが、この夏のことだった。

相馬方最前線の小斎城を攻めるべく、その西麓の矢野目に陣所を構えて伊達家の総力を結集させる。

そして一気に駆逐すべく、城攻めに兵を大量投入するも、季節柄発達していた湿地帯に攻め手を奪われ、その上、後方の相馬本陣より出兵してきた金山城兵に挟み撃ちされたことから、散々の敗戦となってしまった。

輝宗はこの後も矢野目を陣所として相馬軍との対峙を続け、天正十二年の和睦成立に至るまで、延々たる持久戦を展開することになる。

今回顕綱が参陣したのは、そんな矢先のことだ。

清顕が自ら出兵しなかったのには、訳がある。

清顕の正室は相馬盛胤の妹である。また、田村氏は慢性的に磐城氏と対立関係にあることから、塩を始めとする海産物の調達は基本的に相馬領に頼らざるを得ない。

その為、相馬と正面切って敵対する訳に行かず、直々に清顕自身が出陣することが憚られた、というのが表向きの理由である。顕綱

の私的な出兵という形にした訳だ。

相馬が優勢であればこそ、均衡を保つ意味では相馬に加担するのは不適切だし、関係性の上で伊達と相馬を天秤に懸ければ、どうしても伊達が重い。

そしてこの時期に顕綱を戦陣へ遣わしたのは、清顕にして見れば厄介払いの意味合いが強かっただろう。

一方で清顕は、安積郡制圧を目論見、動員を掛けていた。

顕綱留守の塩松勢、陣代には助右衛門親綱が任命された。清顕にとってこの人事は、大内家中の、延いては塩松勢の分裂を期待するものだった。

切れ者の顕綱は、ともすれば人から反感を買うことも多かった。

それでもここまで大事に至らずに来たのは、大らかな性格の親綱が常に顕綱の傍らにいて、塩松勢の和を取り持ってきたことが、理由として大きかった。

即ち、人望篤い親綱を顕綱から引き離し、兄と同格の存在に祭り上げれば、顕綱の力を削ぐことができる考えたのだ。

だから、顕綱は早く帰りたい気持ちだったが、伊達軍劣勢の中で、それを見捨てる形で退くことはできないし、何より輝宗や清顕から許しを得ねば、帰れる道理もない。

親綱がその心中を察してか、度々書簡にて近況を連絡してくることも、何よりの気休めとなっていた。

親綱も清顕の思惑を察知していない訳はなく、不在とはいえ塩松の惣領は顕綱であって、此度の安積出兵でも自分は兄の名代であることを肝に銘じ、周囲にも勘違いせぬよう、再三強調していたことが推し量られる。

ある日、頭綱の陣所に輝宗が訪れた。

矢野目への着到以来ひと月を過ぎるというのに戦鬭らしい戦鬭もなく、頭綱は無駄に過ぎる日々を苛々しながら過ごしていた。

だから不意の輝宗の訪問を、何であれ出来事があったものと歓迎した。

「先ほど田村より書簡が届いてな――」

輝宗は相変わらず飄々とした態度で、しかし眼光ばかりは鋭く、頭綱の表情を具さに窺うように、朗らかな口調で話した。

「片平が陥ちたようだ。聞いておるかな」

安積郡は鎌倉以来、名族伊東氏が地頭として一円支配をしている。しかし代を重ね分割相続が進むうち、一族中から郡内一円を支配しおおす英傑が遂に現れず、強力な支配体制を逸早く確立しおおせた周辺諸氏による蚕食の場となっていた。

片平伊東氏は一族中でも大身で、天文以来、葦名氏を後ろ盾として長い間田村氏の西進を食い止めてきていた。

「弟助右衛門からは先日、先鋒を承ったとの由、報されておりました。こんなにも早く抜くことができたとは、かの者に功があったのでしょうか」

輝宗は「それでな――」と重く口を濁した。

頭綱は「如何なされましたか」と問うたが、その内容は、実は既に察していた。先刻、親綱から書簡が届いていたのだ。

「その助右衛門に、片平の家を継がせることにしたと。良きこと故、惣領の其方に報せるまでもなく、即座に決定済みと為したそうだ。伊東大和守の娘御と娶わせるとのこと」

輝宗は「其方どう思う？」といった表情で、返答を促した。

顕綱は明るい表情を作った。

「悦ばしいことです。片平といえば、名家伊東一族の本家筋とも言われております。身内ながら、助右衛門なら充分その跡を継ぐ資質を持ち合わせていると思います」

顕綱は笑ってみせた。

輝宗は黙ってその表情を見つめていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0073z/>

変節

2011年12月19日23時05分発行